

第1章 添田町の歴史的風致形成の背景

1. 自然的環境

(1) 位置

本町は、福岡県の東南端、福岡市及び北九州市から約40kmの距離に位置し、田川郡の最南端に位置する町である。町域の北部は、川崎町や大任町、赤村、東部はみやこ町、西部は嘉麻市、南部は東峰村や大分県中津市、日田市と接する。南部の大分県と接する行政界は境界未確定となっている。

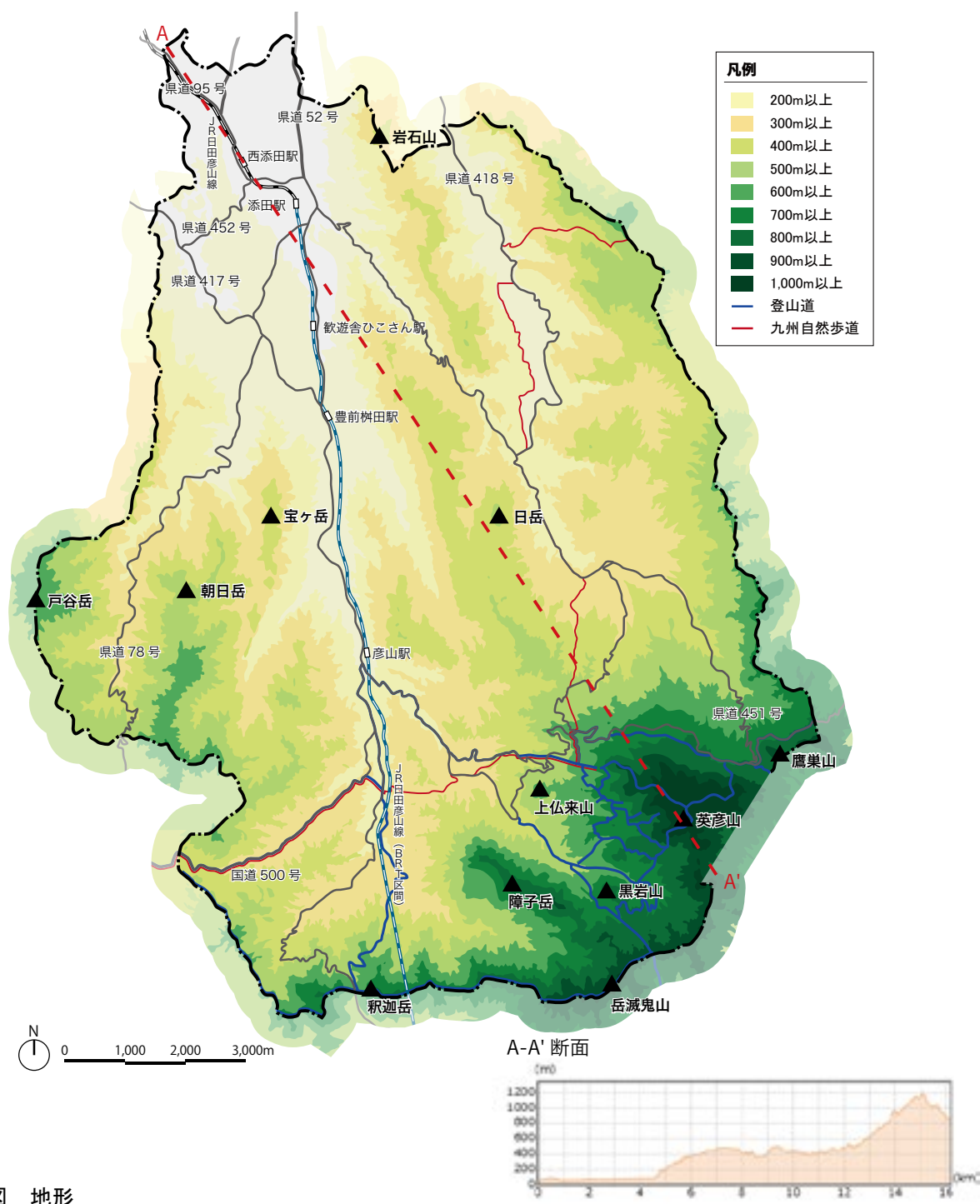


図 本町の位置

(2) 地勢

町域は、東西 13 k m、南北 16 k m、面積 132.10 k m²であり、県下有数の広大な面積を有している。地形は、標高 1,199 m を有する英彦山^{ひこさん}を主峰として、鷹巣山^{たかのすやま}や岳滅鬼山^{がくめきやま}等の山々が南部の東西に高原状に連なっており、これに直交するように幾つかのまとまった高地や丘陵地が広がり、北部の添田駅^{ちくほう}周辺に平地が広がる。英彦山は、北部九州有数の高山であり、北部の眼下には筑豊^{あそ}の山野が広がり、晴れた日には南部の方角に遠く阿蘇^{あそ}の山々を眺望することができる。英彦山に連なる山々には登山道や九州自然歩道等が整備されており、老若男女を問わず気軽に登れる山として、一年を通じて多くの登山客が訪れている。

また、北部に位置する岩石山^{がんじやくさん}は、ところどころに巨岩が露出する地形険しい山である一方、山頂から北西部に位置する田川盆地^{たがわぼんち}を望むことができる山として、戦国時代から戦略上の要地として重要視されてきた。



(3) 地質

町域の南北方向で地質が変化している。南側の英彦山周辺は英彦山火山岩類などや北坂本累層となり、中央では添田（落合）花崗閃緑岩や高压片岩類が多く占める。添田駅や添田町役場のある北部の平地部分は沖積層である。また、北部には石炭採掘岩塊（ボタ山）もみられる。

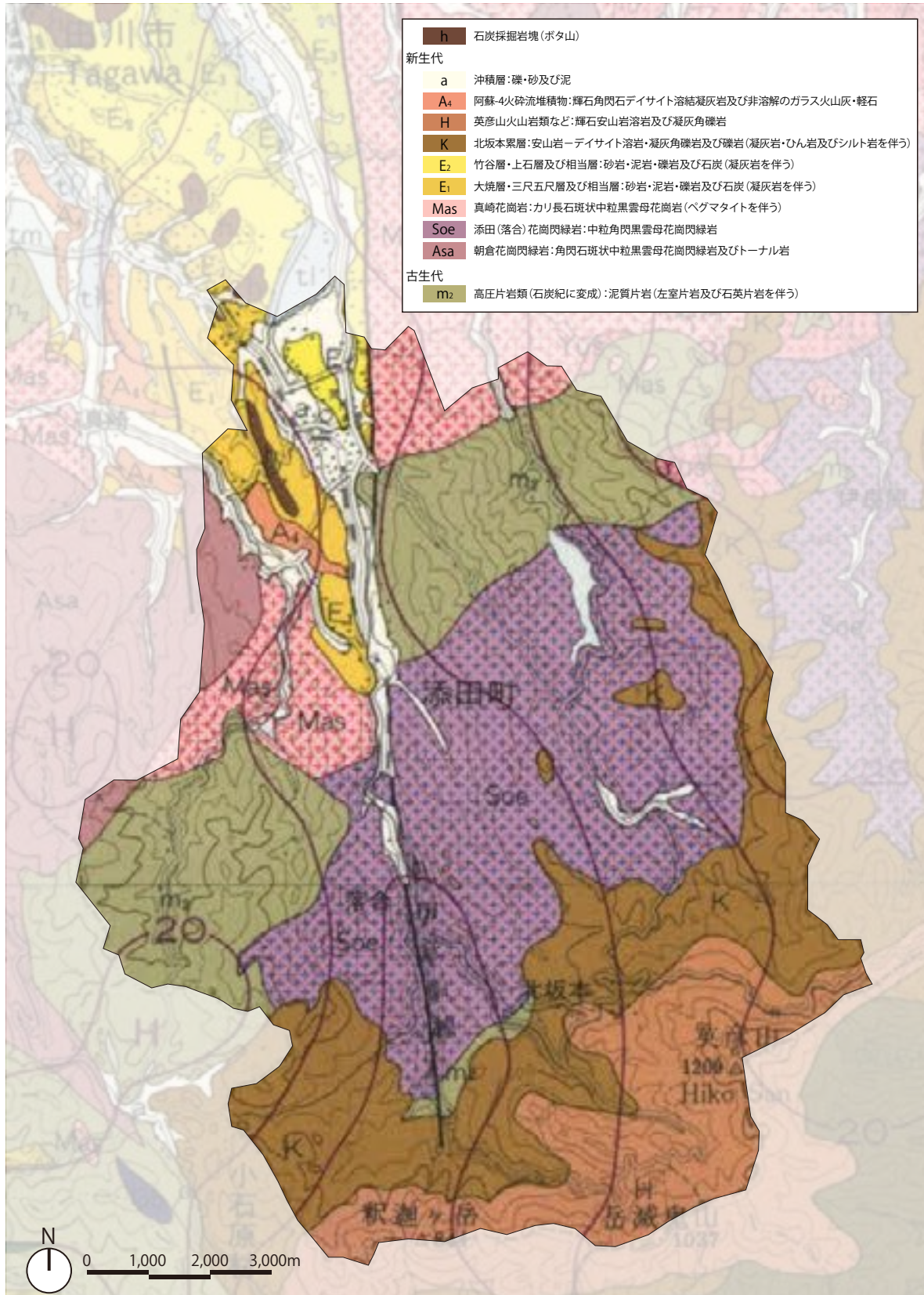


図 地質

【資料：地質図幅「福岡」（産総研地質調査総合センター）】

(4) 水系

本町を流れる主要河川は、英彦山に端を発し、本町の中央を流れる彦山川、東側の津野谷を流れる今川と、本町の西南端の町境を源流とし、西側の中元寺谷を流れる中元寺川がある。今川は、瀬戸内海南西端に広がる海域の周防灘へ、彦山川と中元寺川は、下流域で合流して遠賀川となり関門海峡の北西に広がる海域の響灘へ注いでいる。英彦山は異なる海につながる水系の源流が存在する大分水嶺であり、国内では4ヶ所のみ確認されている。

これらの河川は、英彦山一帯の諸山の水を集めたもので水量も豊富である。英彦山裾野までの山間部は高低差と狭隘な川幅により急流であるが、平野部は比較的穏やかな流れである。

上流部は深い渓谷と河川敷の桜や紅葉、蛍と相まった絶景が各所にあり、季節ごとに違った風情を醸し出して、訪れた観光客の癒しとなっている。また、河川にはハヤ（カワムツ）やゴヒナ（カワニナ）などが優占する種であるが、清流には多くの淡水魚が生育する環境がある。

町内にはダムが二つあり、洪水調整やかんがい等を目的に、昭和46年（1971）に今川の上流部にあたる下津野に油木ダムが、昭和50年（1975）に中元寺川の上流部にあたる上中元寺に陣屋ダムが完成した。

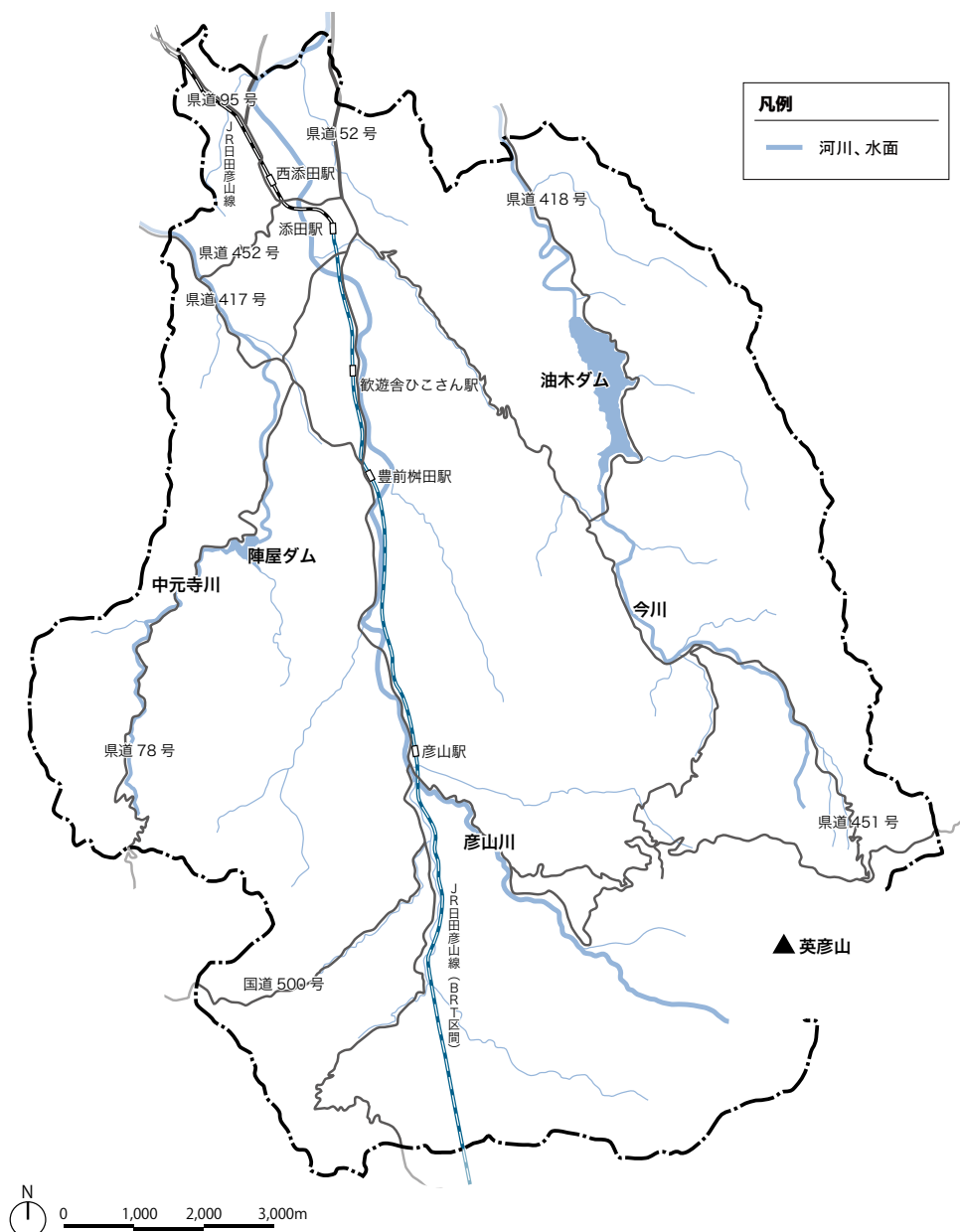


図 水系

(5) 気象

本町は、平野部の添田駅周辺から山間部の英彦山の山頂まで 1,100m 以上の標高差があるため、平野部と山間部で気象条件が大きく異なる。

平野部（添田）の気温は、年間平均気温 15.7℃であり、夏期は最高気温が約 37℃まで上がる一方、12月から3月までの冬期は最低気温が氷点下まで下がり、積雪を記録することもある。一方、山間部（英彦山）の気温は、年間平均気温 12.7℃と平野部よりも低く、相対的に涼しい一方、冬期は多量の積雪に見舞われる。

年間降水量は、平野部（添田）では 2,011.75mm に対し、山間部（英彦山）では 2,648.20mm と多くなっており、一年を通じて 6 月から 8 月の降水量が多い。

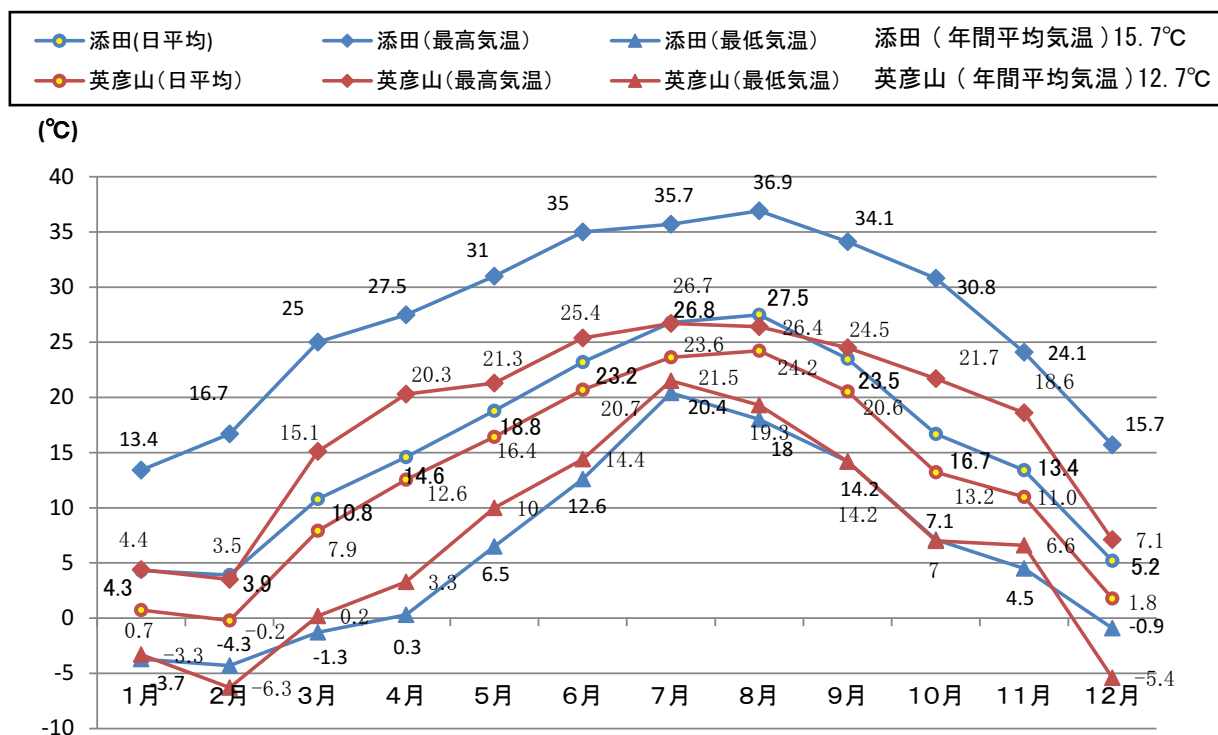


図 月別の気温

【資料：添田／気象庁 HP、英彦山／町資料】

* グラフ中の数値は、令和 4 年 (2022) のデータ

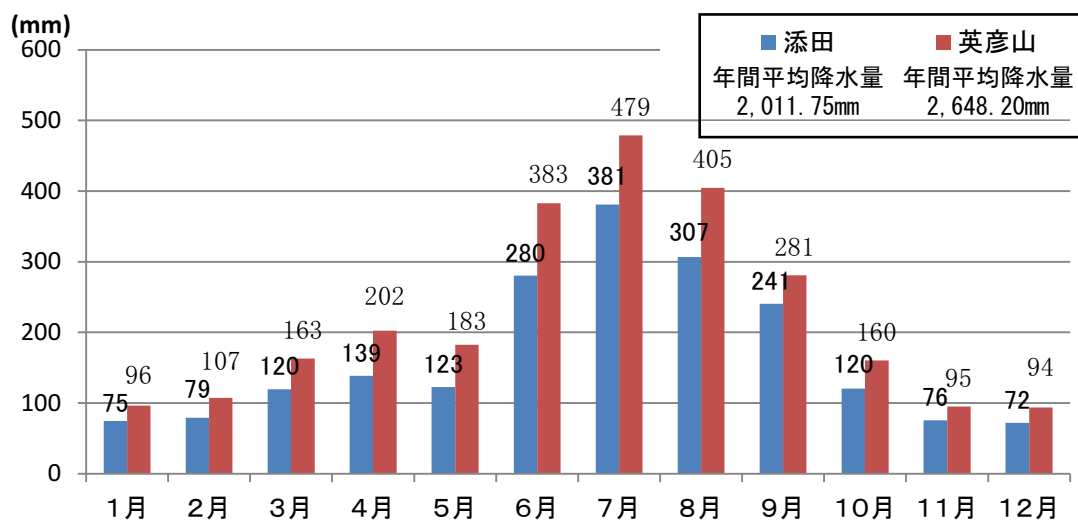


図 月別の降水量

【資料：気象庁 HP】

* グラフ中の数値は、過去 10 年間（平成 25 (2013) 年～令和 4 年 (2022)）の平均値

(6) 植生

気象と同様に、本町は、添田駅周辺の平野部から英彦山の山頂で1,100m以上の標高差があるため、大きく2つの植生帯に分類することができる。標高700mまではスギやヒノキ、スダジイ等を中心とする照葉樹林が分布し、それより高い場所にはブナやミズナラ、イロハモミジ等を中心とした夏緑樹林が分布している。英彦山は、我が国屈指の霊山であるため自然が大切にされてきており、原生的な自然が広く存在し、北部九州随一の高山であるため、冷温帯の植物は県内唯一の植生地で、福岡県では最も自然度の高い山域といえる。

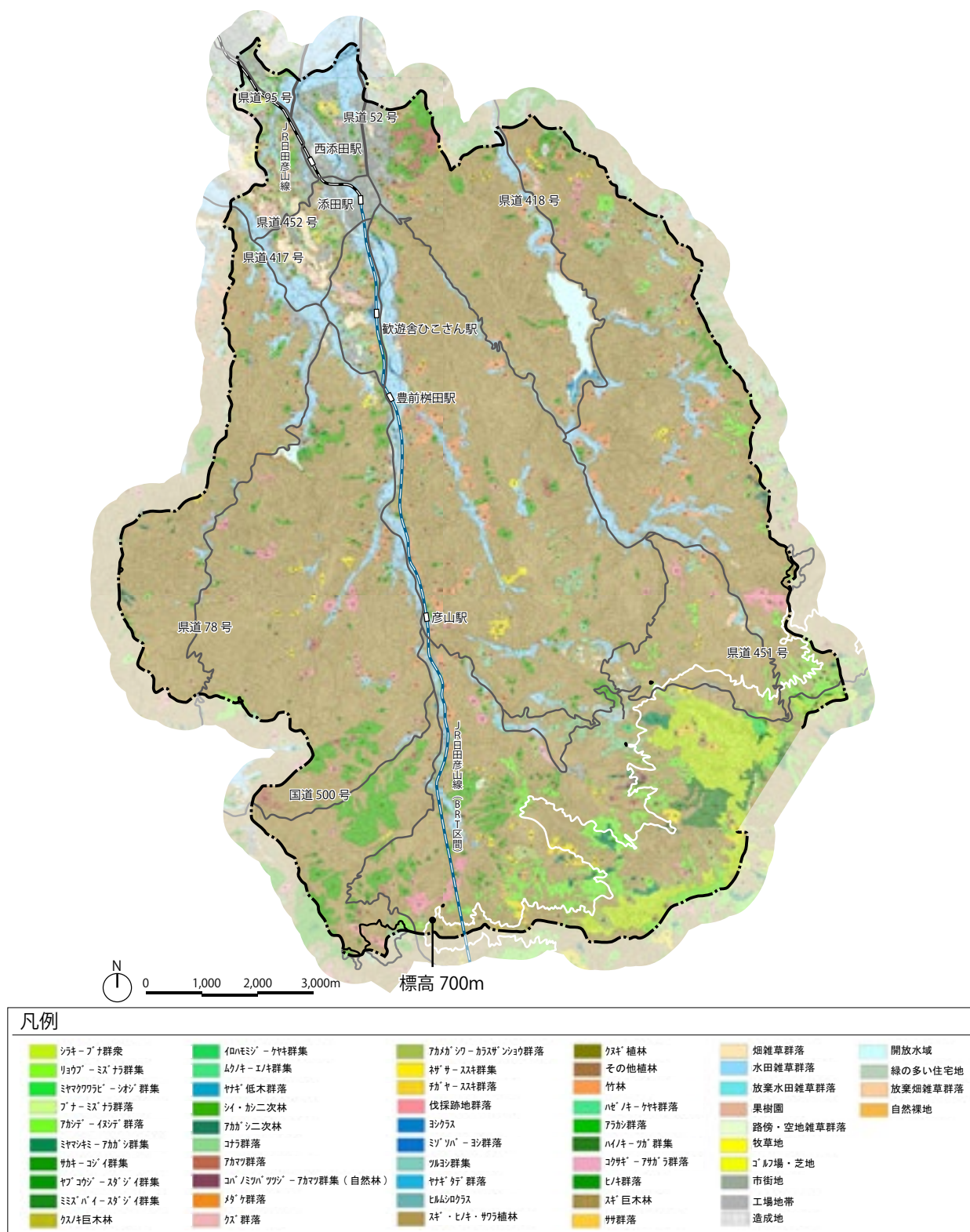


図 植生

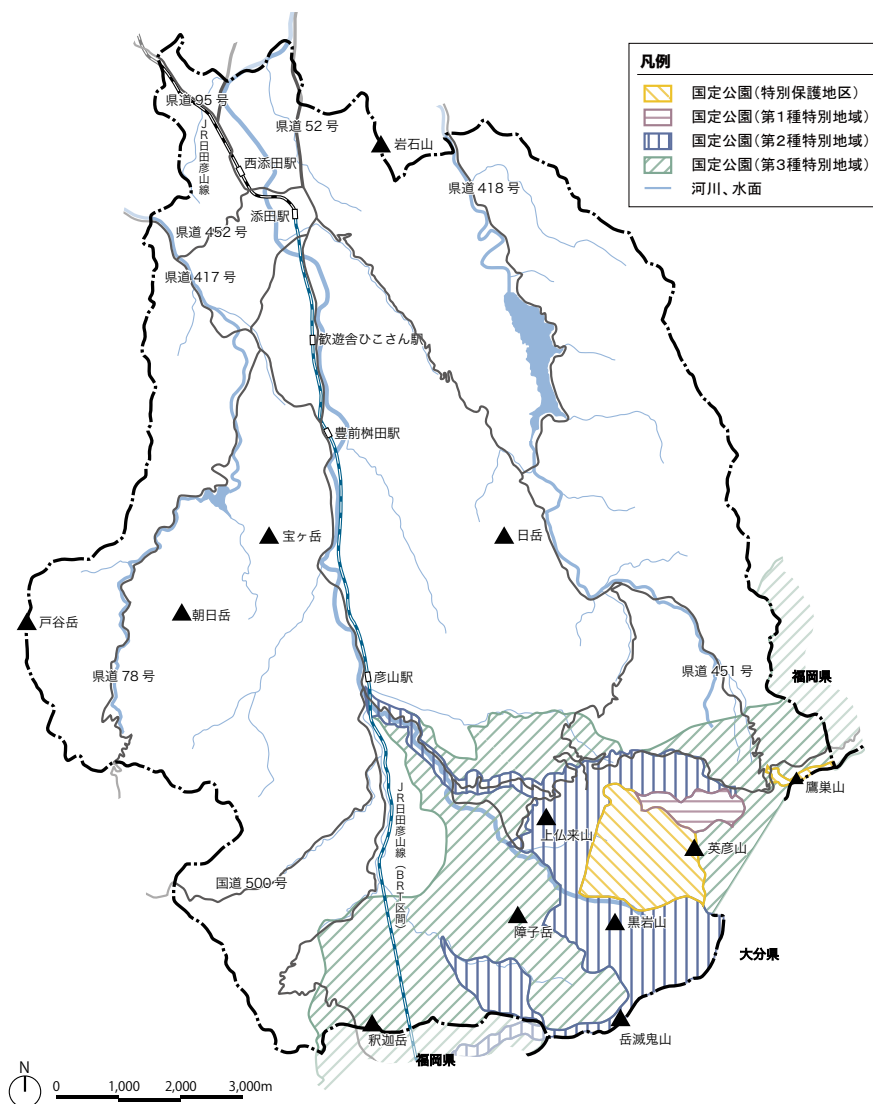
【出典：自然環境保全基礎調査】

(7) 国定公園

耶馬日田英彦山^{やばひたひこさん}国定公園は、国内最初の国定公園として、福岡県・大分県・熊本県の3県にまたがる東西約40km、南北約50kmに及ぶ約85,024haの区域が昭和25年（1950）に指定された。

本国定公園の特色は、火山活動と河川の浸食で形成された山岳、高原、盆地、溪谷からなる自然地形にある。

本町内の区域は、英彦山を中心に2,692haが指定されており、英彦山の山頂付近の322haについては、ブナやクマイザサ、モミ、ツガの自然林が分布する県内でも類のない貴重な林であり、学術的・文化的に重要な地域として特別保護地区に指定され保護されている。



参考) 日本百景「英彦山」

昭和2年（1927）4月、昭和の新時代を代表する勝景を新しい好尚により選定することを目的に、大阪毎日新聞社・東京日日新聞社の主催、鉄道省の後援により「日本新八景」が選定された。また、同時に「日本二十五景」「日本百景」が選定された。

これは海岸・湖沼・山岳・河川・溪谷・瀑布・温泉・平原の8つの部門において、一般投票により候補地を募集し、各部門の上位10位を選出の上、検討委員会が新日本八景を選定されたもので、同時に日本二十五景、日本百景が選ばれた。

本町の英彦山は、936,509票を獲得し、山岳部門で日本百景に選定されている。

2. 社会的環境

(1) 町村の合併経緯

本町は、明治22年(1889)の市制・町村制施行により添伊田村と野田村、庄村が合併して添田村となり、明治40年(1907)に中元寺村と合併、明治44年(1911)の町制施行により添田町となった。また、明治22年(1889)に落合村と榊田村、彦山村が合併してできた彦山村と昭和17年(1942)に合併し、昭和30年(1955)の津野村との合併により行政区域が拡大され、現在の町域となっている。現在の大字は、明治22年(1889)の市制・町村制施行により成立した8つの村の名称に由来するものである。

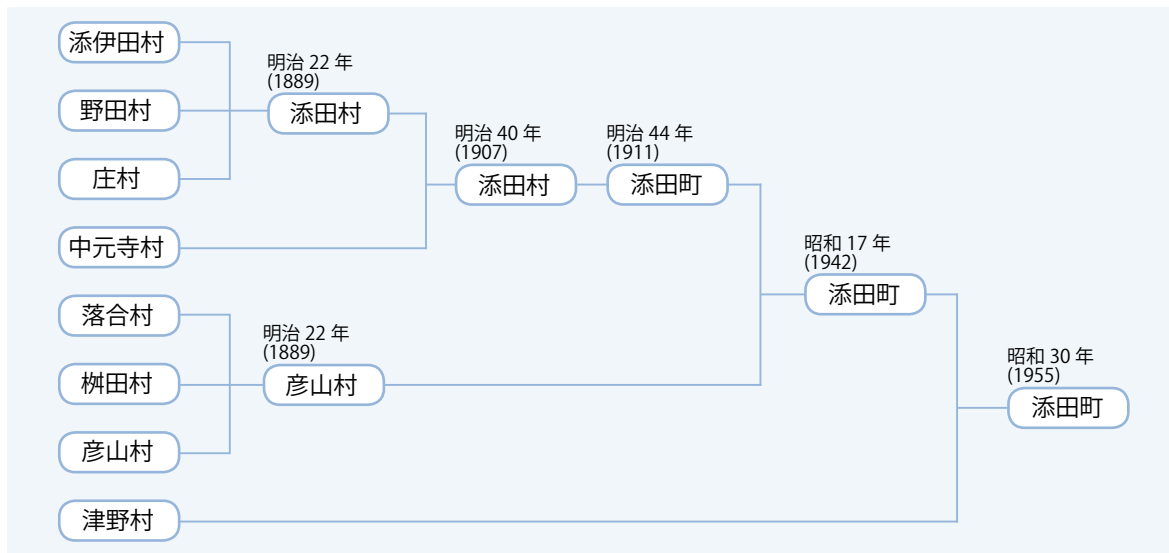


図 町の沿革

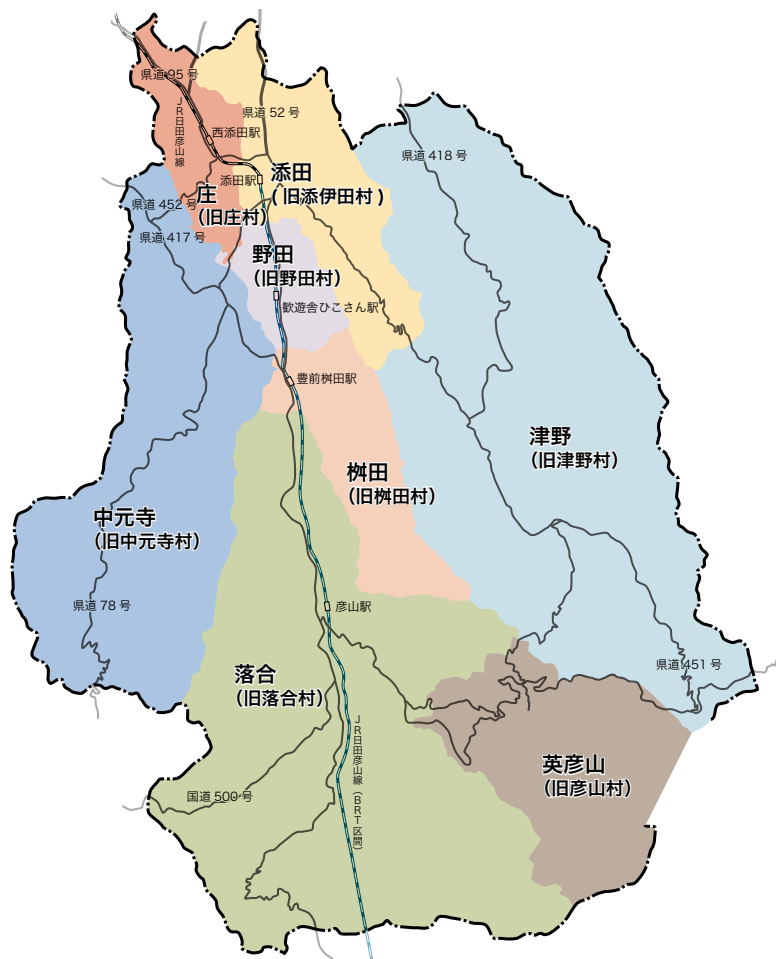


図 大字界

* 括弧内は旧村名

(2) 土地利用

土地利用をみると、町域の多くを森林が占めており、県道等の道路沿いに田が分布している。町北部の平地部分に建物用地が多い。

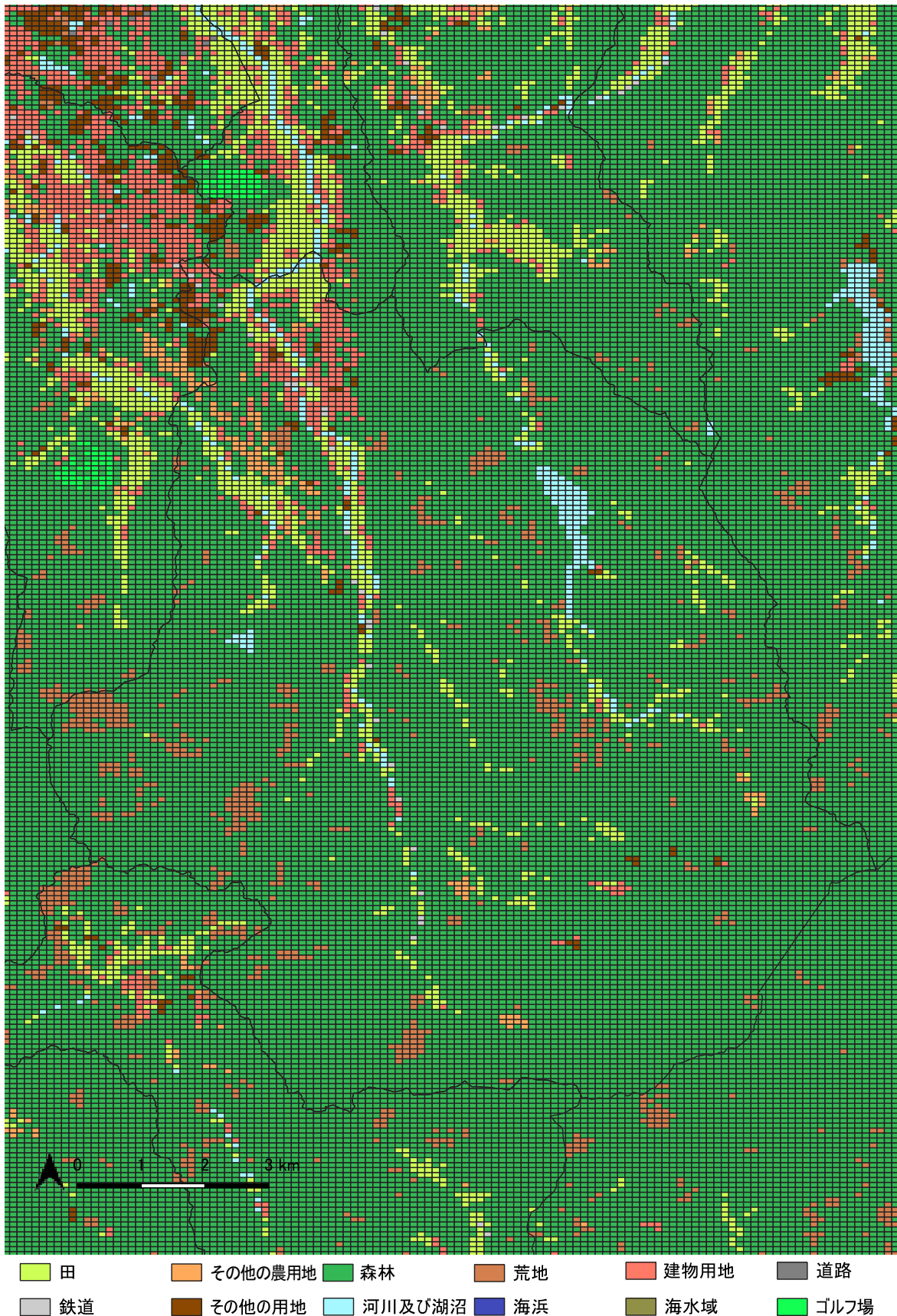


図 土地利用

【資料：「国土数値情報土地利用細分メッシュデータ」（令和3年（2021））】

(3) 人口

本町の人口は、令和2年（2020）時点で8,801人である。昭和10年（1935）以降、町村合併と石炭産業の発展により人口は増加の一途をたどり、昭和30年（1955）に27,978人となった。しかし、エネルギー革命による昭和44年（1969）の炭坑完全閉山とともに、最盛期から約11,000人もの急激な人口減少を来すこととなり、それ以降も少子化や都市部への人口流出により徐々に減少している。将来推計では、令和27年（2045）には4,612人となっている。

高齢化率は増加傾向にあり、昭和60年（1985）に約18%であった高齢化率は令和2年（2020）には約45%まで増加している。将来推計では、令和27年（2045）には約51%となり、今後も高齢化が進行することが予測される。

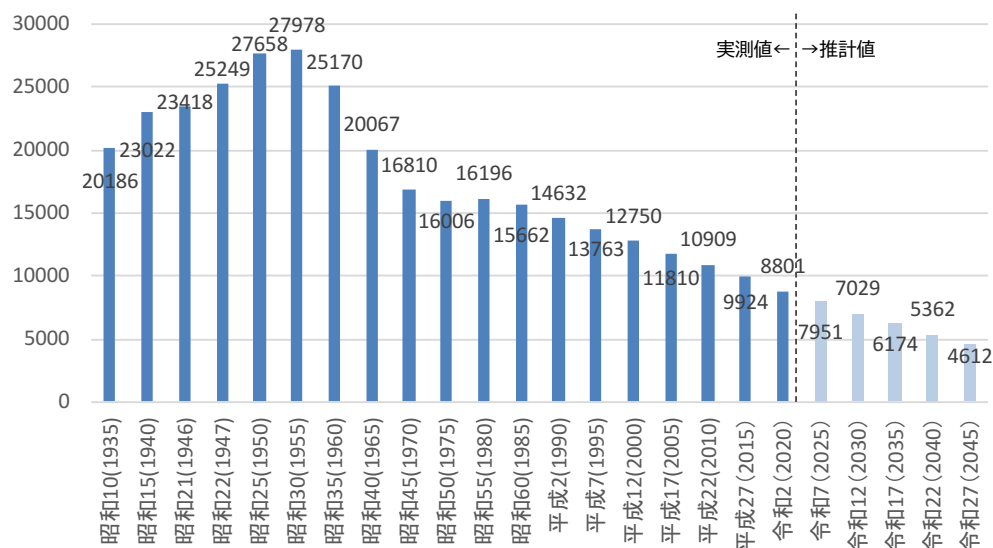


図 人口の推移

【資料：国勢調査、日本の地域別将来推計人口（平成30年（2018）、国立社会保障・人口問題研究所）】

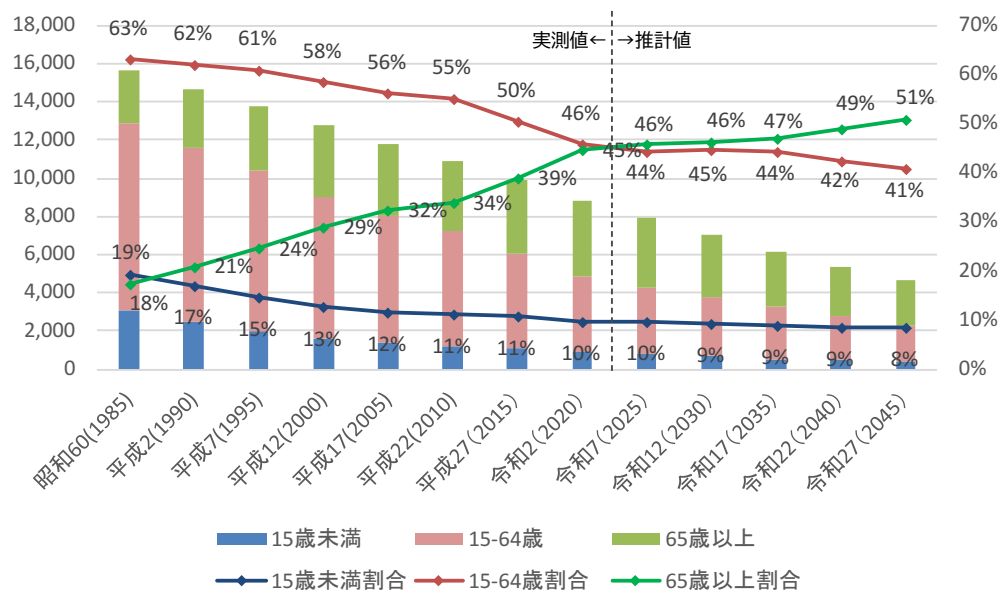


図 年齢区分別人口の推移

【資料：国勢調査、日本の地域別将来推計人口（平成30年（2018）、国立社会保障・人口問題研究所）】

(4) 交通

本町は、北部以外の三方向を山に囲まれ、昔から他地域との交通のため峠道が発達しており、国道 500 号や県道 78 号、県道 451 号等が整備され広域的な主要道路としての役割を担っている。

鉄道は、小倉駅から日田駅を結ぶ JR 日田彦山線が南北を縦断し、町内には 5 つの駅を有している。平成 29 年(2017) 7 月の九州北部豪雨により添田駅～夜明・日田駅間が被災したが、その後整備が行われ、令和 5 年(2023) 夏に BRT (バス高速輸送システム) の運行が開始された。本町内は添田駅～彦山駅間は一般道を走行し、彦山駅からは BRT 専用道を走行する。

そのほかの公共交通機関はバスがあり、本町と田川市を結ぶ川崎町経由の西鉄バス筑豊株式会社の 1 路線のほか、添田駅を中心としたコミュニティバスが巡回しており、学生や高齢者等の移動手段として広く利用されている。

英彦山の参道には、英彦山神宮銅鳥居^{*1}から英彦山神宮奉幣殿^{*2}まで、スロープカーが整備され、英彦山を参詣する人々に利用されている。

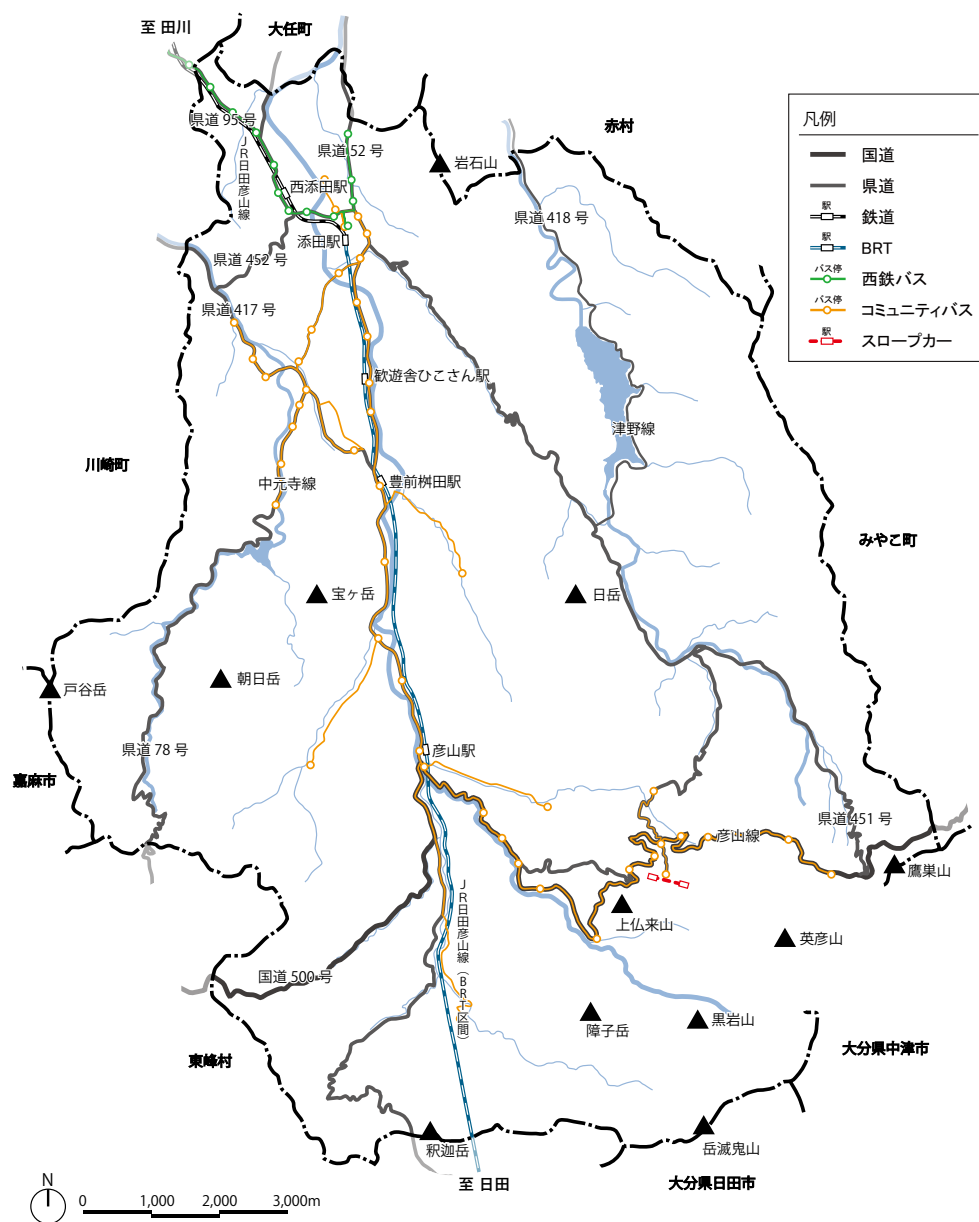


図 交通網

*1 文化財の指定名称は「英彦山神社銅鳥居」であるが、文化財を指す場合を除き現名称である「英彦山神宮銅鳥居」と表記する。

*2 文化財の指定名称は「英彦山神社奉幣殿」であるが、文化財を指す場合を除き現名称である「英彦山神宮奉幣殿」と表記する。

(5) 産業

ア 産業全般

本町の産業は、炭鉱最盛期には、英彦山への往来により形成された日田道^{ひ た みち}を中心に、生活物品やお土産物等の商店、工場が軒を連ね、活気に溢れていた。また、戦災復興による木材の需要増加に伴い、林業製材業も発達していた。しかし、昭和44年(1969)の炭鉱完全閉鎖に連動して商工業は衰退し、林業においても輸入木材の流通等により衰退の一途をたどっている。農業は、清流を利用した稲作のほか、金ノ原台地^{きんのぼるだいち}での大根や人参を中心とした畑作も行われており、近年は、トルコギキョウやユリ等の花卉栽培^{かき}も盛んに行われている。観光業においては、英彦山花園や道の駅^{かんゆうしや}歙遊舎ひこさん等の観光関連施設を整備し、行政と町民・企業が一体となって観光業を発展させ、今日に至っている。

産業別人口では、第三次産業が占める割合が高く、その中でもサービス業が多い。近年の産業別就業人口の推移を見ると、就業人口総数は総人口に比例して減少傾向にあり、令和2年(2020)には3,699人(総人口に占める割合約42%)となっている。

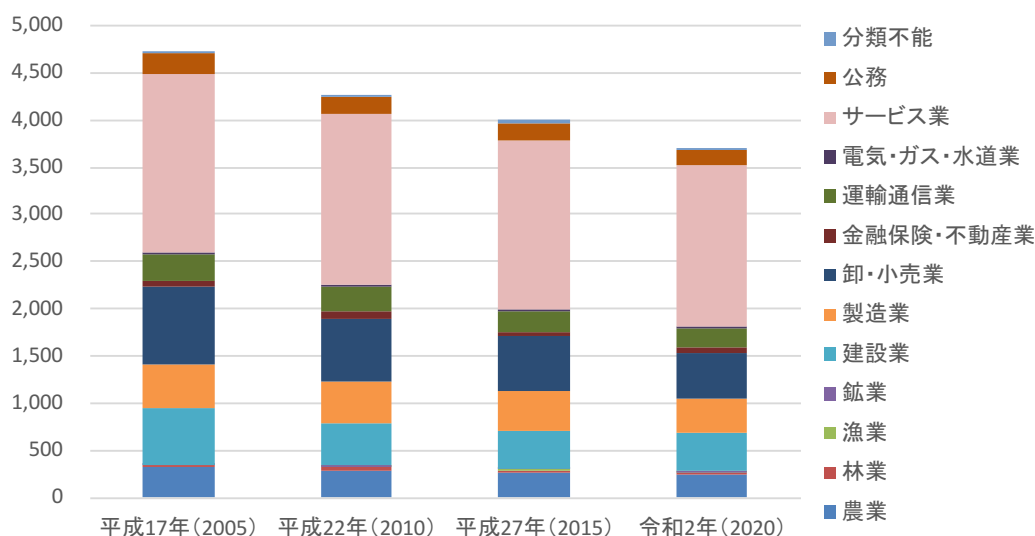


図 産業別就業人口の推移

【資料：国勢調査】

表 産業別就業人口

	区分	平成 17 年	平成 22 年	平成 27 年	令和 2 年
第一次産業	農業	323	287	265	242
	林業	18	42	28	28
	漁業	0	3	2	3
	合計	341	332	295	273
第二次産業	鉱業	9	7	4	5
	建設業	600	445	409	411
	製造業	464	449	431	368
	合計	1,073	901	844	784
第三次産業	卸・小売業	817	660	573	484
	金融保険・不動産業	73	72	33	46
	運輸通信業	267	268	228	201
	電気・ガス・水道業	23	21	21	17
	サービス業	1,899	1,804	1,793	1,722
	公務	209	185	173	157
	分類不能	9	14	47	15
	合計	3,297	3,024	2,868	2,642
総合計		4,711	4,257	4,007	3,699

【資料：国勢調査】

イ 観光

本町は、有数の観光資源である英彦山を擁するとともに、観光振興としてバーベキュー等のアウトドアが満喫できる英彦山野営場や、町の花であるシャクナゲ 5,000 本をはじめ 70 種類以上、3 万 2 千本以上の花木が咲き乱れる英彦山花園、桜の名所として名高い添田公園、英彦山修験道に関する重要文化財等が展示されている英彦山修験道館、ドライブオアシスと物産販売所を兼ね備えた道の駅歓遊舎ひこさん、観光客の宿泊施設であるホテル和等の多種多様な施設が整備されている。

観光客数について、町内主要施設の入込客数をみると、その他（登山など）が最も多く、次いで道の駅歓遊舎ひこさんが多い。合計でみると、令和元年（2019）まで増加傾向にあったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、令和 2 年（2020）に落ち込み、それ以降は回復傾向にある。

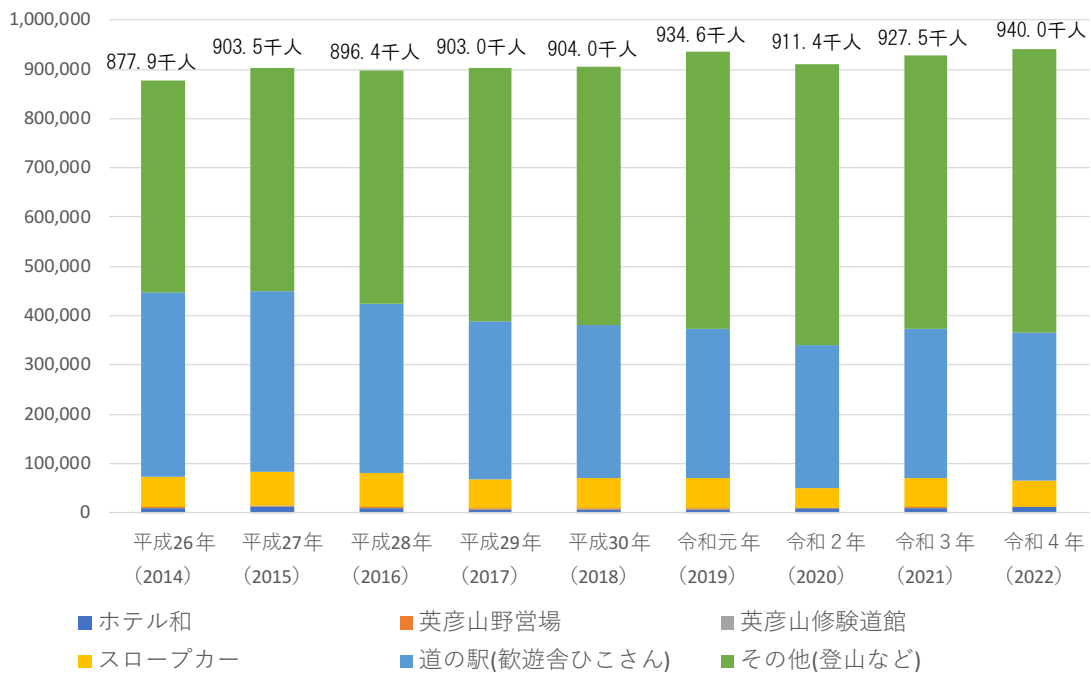


図 観光入込客数（主要施設入込客数）の推移

【資料：添田町資料】

表 年ごとの主要施設の入込客数

	ホテル和	英彦山野営場	英彦山 修験道館	スロープカー	道の駅 (歓遊舎ひこさん)	その他 (登山など)	合計 (人)
平成 26 年 (2014)	10,338	617	1,612	60,520	373,829	430,984	877,900
平成 27 年 (2015)	11,365	737	1,802	69,313	367,428	452,855	903,500
平成 28 年 (2016)	10,500	1,017	1,384	67,172	344,620	471,707	896,400
平成 29 年 (2017)	7,775	936	1,169	58,415	319,622	515,083	903,000
平成 30 年 (2018)	7,944	1,252	836	60,222	310,556	523,190	904,000
令和元年 (2019)	8,300	964	666	61,134	302,954	560,582	934,600
令和 2 年 (2020)	8,954	583	598	39,950	290,803	570,512	911,400
令和 3 年 (2021)	10,803	725	817	58,558	302,965	553,632	927,500
令和 4 年 (2022)	11,746	621	710	53,010	299,011	574,902	940,000

【引用：添田町資料】



図 観光施設



道の駅歓遊舎ひこさん



英彦山スロープカー



英彦山修験道館

参考) 田川まるごと博物館

田川まるごと博物館とは、田川地域全体を博物館に見立て、地域の豊かな自然や歴史、文化などを展示物としてPRするプロジェクトである(平成25年(2013)3月開館)。

本町のシンボルである「英彦山」や重要文化財である「英彦山神社奉幣殿」、「英彦山神社銅鳥居」、観光スポットである「添田公園」、「道の駅 歓遊舎ひこさん」等の資源の魅力をガイドブックやWEBサイトで情報発信している。

【たがわネットー田川まるごと博物館 (<http://tagawa-net.jp/>)】



3. 歴史的環境

(1) 原始

ア 縄文時代

本町の南には筑後川、山国川、遠賀川、今川など北部九州の大型河川の源流をなす天水分の山「英彦山」が位置し、豊かな自然に育まれて縄文時代から人々の営みがあった。

英彦山山麓の津野地区、杵田地区の扇状地に多くの縄文遺跡が検出され、下井遺跡では筑豊域最古である縄文時代早期のイノシシ捕獲の落とし穴遺構が発見されている。

縄文時代後期には住居を作って定住するようになり、後遺跡、杵田遺跡などで住居跡が発見されている。その中でも、後遺跡の土壙墓から出土したヒスイ製大珠は、遠く 1000 km も離れた新潟県糸魚川からもたらされたもので、当時の人々の交易の広さを示すものである。



後遺跡の土壙墓



後遺跡のヒスイ製大珠

イ 弥生時代

弥生時代の歴史を物語る遺跡として、庄地区丘陵部に初源的青銅器生産遺跡である庄原遺跡（県指定史跡）が存在する。庄原遺跡からは、金属溶解炉跡や周溝状工房跡などの工房遺構とともに銅鉈鋳型（国内最古級）が出土している。銅鉈は古代中国の楚（B.C. 230 頃）の領域で多く発見されており、日本では、有明海を中心に見つかっている。その鋳型が見つかったことは、この庄原遺跡が早くから大陸と文化、技術交流をもっていた遺跡の 1 つということができ、弥生時代の社会を知る重要な遺跡として注目される。また、多くの砥石や輸入鉄器とともに平成 7 年（1995）には国内最古の金属溶解炉も発見され、大規模な生産遺跡であることも判明した。当時の人々が大陸と文化的・技術的に交流していたことを示している。金属器使用の日本での始まりを考えるうえで重要な遺跡である。



庄原遺跡金属溶解炉跡



庄原遺跡の銅鉈鋳型

ウ 古墳時代

町内にはこれまで 9 基の古墳と 20 基の横穴墓が発見されており、このうち、岩瀬古墳群（岩瀬一号墳、三号墳、四号墳は墳丘、二号墳は墳丘の裾部はなく石組が露出、五号墳は消滅）と野田古墳（墳丘）の 5 基の古墳、土器横穴群が現存する。この古墳群



岩瀬 2 号古墳

は、遠賀川南限に位置しており、
内陸最深部まで古墳文化が及ん
でいたことがわかる。

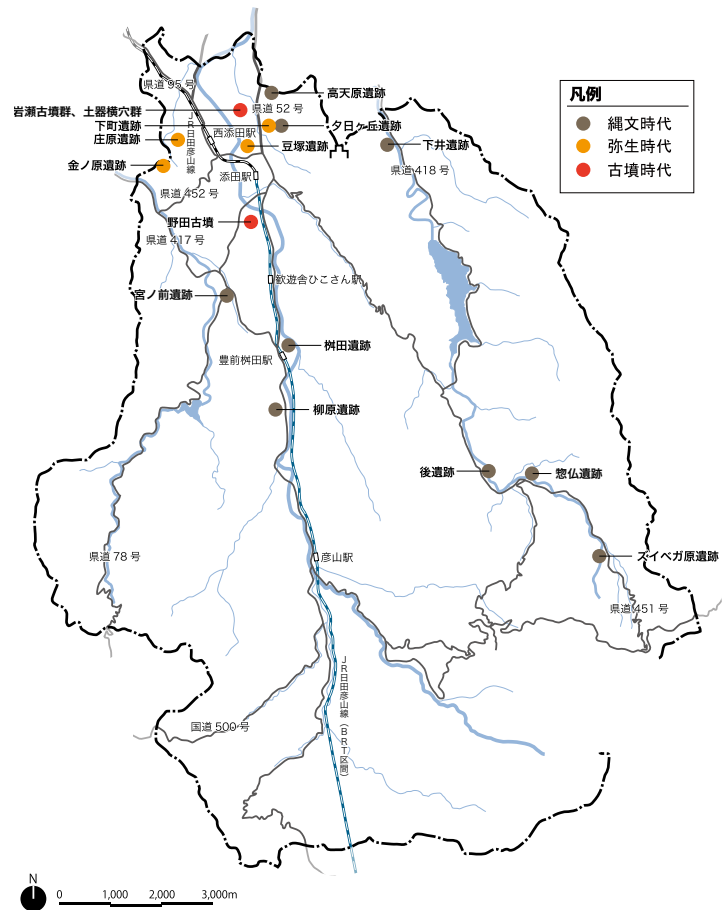


図 主要遺跡の分布

(2) 古代

ア 彦山の開山

彦山の開山は、仏教が日本に伝来した初期のころで、中国の僧侶が彦山に靈山寺を開いたと伝えられている。『彦山縁起』(元禄7年(1694))等によれば、継体天皇25年(531)に北魏の僧、善正による開山説が見られるが、8世紀の初め頃の役小角の入峯説や、その門流寿元による天平6年(734)の開山、また豊前宇佐出身の僧である法蓮上人による弘仁13年(822)の修験開祖説などさまざまな説がある。

彦山の名称の由来は、御祭神である天忍穗耳命にある。天忍穗耳命は、八百万の神の最高位、日の神である天照大神の御子であることから「日子山」と呼ばれていたと伝わり、その後の弘仁10年(819)、嵯峨天皇が、彦山中興の祖宇佐弥勒寺の別当である法蓮上人に「日子」の2文字を「彦」に改めるよう詔勅を下したことで、「彦山」となると伝わる。

聖域である彦山内は、三つの鳥居を結界とした天台教学の四土結界思想に基づき領域区分がなされており、その聖域の中心的位置づけにある実報莊嚴土には、弥勒菩薩の都卒修行四十九窟を置き、山伏は「即身仏」たる厳しい修行をした。平安時代、末法思想の流布とともに山頂に多くの経塚が営まれ、彦山への信仰が広まっていたことがわかる。



彦山開山縁起絵
(江戸時代、英彦山神宮所蔵)

イ 荘園の成立

町内では中元寺宮ノ前遺跡から奈良～平安時代にかけての郷庁跡とみられる遺跡が発見されている。官衙遺構でしか見られない墨書土器、中国製青磁、緑釉陶器などの遺物とともに大型の建物跡が発見されている。古来、中元寺から川崎町安真木にかけては「虫生庄」と呼ばれていた。『宇佐神宮領大鏡』（鎌倉時代）には「虫生稲光／田数六〇丁、同時定卅五丁」、「仲虫生別符本者府領也」とあり、大宰府領であったことがわかる。その後、永長2年（1097）、宇佐弥勒寺に寄進されたと伝えられている。この虫生別符が後に中元寺荘となったと考えられている。

中元寺薬師堂には横川の恵心僧都が安置したという平安時代後期の薬師如来坐像（県指定有形文化財）があり、往時を偲ぶことができる。また、『大宰府安楽寺草創日記』（長祿3年（1459））によると、永承2年（1047）に後冷泉天皇の御願によって安楽寺金堂が建立され、「副田庄七十町」などが寄進されたとある。これらは、現在の町域が各地の寺社荘園に組み込まれる程の重要な場所であったことを物語っている。



中元寺薬師堂薬師如来坐像
（平安時代後期、上中元寺区所蔵）

ウ 彦山の興隆

10世紀頃には、僧侶や修験者らが次第に組織化され、強大な勢力を持つようになっていく。中世、神は仏の仮の姿であるという権現思想、神仏習合が世の中に広まると、十二社権現や四十九窟の行場を有する山林修行の一大道場を築いた彦山にも、彦山権現信仰が生まれる。彦山権現信仰は、醍醐天皇による豊前守惟房をしての奉幣（延喜18年（919））や、源経基（天慶3年（940））や伊勢守源頼義（康平5年（1062））等の武士の信仰祈願の記録に記されていることから、武士からも崇敬されていたことがわかる。

『中右記』（保延4年（1138年））によると、寛治8年（1094）、彦山と弥勒寺の衆徒が大宰府に強訴して大乱闘を起こし、時の大宰大貳藤原長房は都へ逃げ帰った事件が記されている。このことから、当時の彦山は弥勒寺の支配下にあつて霊山としての体裁を整え、相当数の衆徒を抱えるに至っていたことが知られる。

やがて弥勒寺支配の影響もあつてか天台の霊山としての成長を遂げ、『長寛勘文』（長寛2年（1164））中の「熊野権現御垂迹縁起」に、「往古、甲寅年（534）、唐の天台山の王子信の旧跡也。日本国鎮西日子の山の峯に天降り給ふ。その体、八角なる水精の石高さ三尺六寸なるにて天下り給ふ」とあり、また後白河法皇が撰じた『梁塵秘抄』（治承年間（1177～1180））に「筑紫の霊験所は、大山四王寺清水寺、武蔵清滝、豊前国の企救の御堂な、竈門の本山彦の山」と中央の典籍に著されており、その名声は京都の朝廷にも届いていた。

(3) 中世

ア 修験道の成立

鎌倉時代の紀年銘を持つ『彦山流記』(鎌倉時代初期(13世紀))には、四十九窟の修行窟や山内堂宇の様子が克明に記されており、鎌倉時代初期までに英彦山の山内集落や修行形態が完成したことがうかがえる。

また、『彦山諸神役次第』(文安2年(1445))によると、前代の仏教的色合いから転じて、神幸祭や御田祭という祈年祭的祭事を「松会」神事と称し、それに焦点を合わせた神道系山伏の宣度行事が一月から二月にかけて最も多く組み込まれていることが示されている。現在行われている柱松神事や御潮井採り、御田祭、神幸祭は、この神事に由来するものである。

室町時代には大峯修行(春)や葛城修行(秋)の「峯入り」が定まり、その様子が『英彦山大権現松会之図』(寛政年間(1789~1801))に伝えられている。



図 峯入行事 【出典：英彦山大権現松会之図】(寛政年間(1789~1801)、英彦山神宮所蔵)

イ 彦山の最盛期

定着山伏が多くなり組織化されてくると、それを統括する座主を山伏の中から輪番制で選出する統治が始まるが、元弘3年(1333)に、後伏見天皇の第6皇子の長助法親王が彦山座主に就任し、これを機に、輪番制だった座主は世襲制となり、明治維新の終焉まで続いた。その後、室町時代を通じて順調な発展を遂げ、最盛期を迎えている。

宗教面では、『彦山諸神役次第』(文安2年(1445))にみる修験行事の増加や、16世紀の阿吸房即伝による修験儀規・章疏の修験の体系化など、前代には希薄だった山内における修験色の強化・整備が図られている。

世俗面では、神領内の収益を新田開発・交易・産業の振興等によって充実させ、これらの維持・確保のため武装化も行い、治外法権的自治世界が作られた。しかし戦国期に入ると周辺の戦国大名のさまざまな干渉にさらされ、永禄11年(1568)、天正9年(1581)には、大友氏による武力侵攻を受け、壊滅状態となった。さらに豊臣秀吉による天下統一の中で神領は没収され、中世的霊山としての彦山は一旦終焉する。

ウ 岩石城の築城と廃城

山伏の行場でもあった岩石山においては、筑紫の要城として保元 3 年 (1158) 大宰大貳平清盛の命により、大庭景親が山頂を主郭とする城館を築かせた。英彦山修験道の行場でもあった奇岩と急峻な山裾で構成され「豊前一の堅城」という要城であったことから、築城以降、菊池氏、大友氏、大内氏、秋月氏に攻められ、帰属の変更を繰り返しながら、重要な城として存続する歴史を繰り返した。天正 15 年 (1587) 4 月、豊臣秀吉の九州平定に際し、島津方秋月氏の支城であった岩石城は前田利長、蒲生氏郷らの攻防により一日にして落城した。その後、小倉城の付城として豊前領主毛利勝信や細川忠興が支配したが、慶長 20 年 (1615) の一国一城令の発布により廃城となった。



廃城で放置された岩石城の矢穴石



図 岩石城遺構

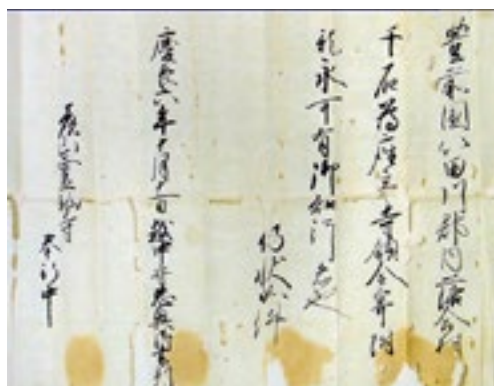
【出典：岩石城史（昭和 52 年（1977））】

(4) 近世

ア 彦山の再建

江戸時代になると前代の豊後大友勢戦禍の灰塵の中から修験道が再興し、大講堂（現、英彦山神宮奉幣殿）の再建、銅鳥居の建立などを中心に英彦山十谷に修験集落が完成した。細川忠興は領内落合1100石を、黒田長政も上座郡黒川300石を寄進し、各地の大名の庇護の下に再興した。また、江戸幕府が宗教統制として行った寺請制度などによって檀家は九州一円に広がり、彦山は「西国一の靈験所」としてその数は42万軒にも達した。また、元禄9年（1696）、天台本山派修験京都聖護院門跡との本末論争の末、幕府より「別山紛れなし」の裁許をくだされ、隆盛を極めた。山伏の数も増加し、俗に「彦山三千八百坊」と言われたように、800もの坊と3000人もの衆人が山中に集った。九州各地からの参詣者も増加し、2月の松会祈年祭には7万人もの参詣があった。

「彦山」の名称は、享保14年（1729）、霊元法皇により「英」の一字を賜り、読みはそのままで表記は「英彦山」となった。



細川忠興知行寄進状（慶長6年（1601）、添田町所蔵）



英彦山神社奉幣殿（重要文化財）



山伏の坊舎（写真は財蔵坊）

イ 四土結界思想に基づく集落の配置

江戸時代における英彦山の聖域と集落立地の関係は、天台教学の四土結界思想に基づく相配の構造が認められている。すなわち、英彦山三所権現の三峰を中核に、三つの鳥居を結界として山内に四土結界の聖域観を設け、銅の鳥居から下は、凡人・聖人の雑居世界（凡聖同居土）、銅の鳥居から奉幣殿の石の鳥居の間は、行者の世界（方便浄土）、石の鳥居から行者堂の木の鳥居の間は、菩薩の世界（実報莊嚴土）、木の鳥居から山頂までは、仏の世界（常寂光土）とした。

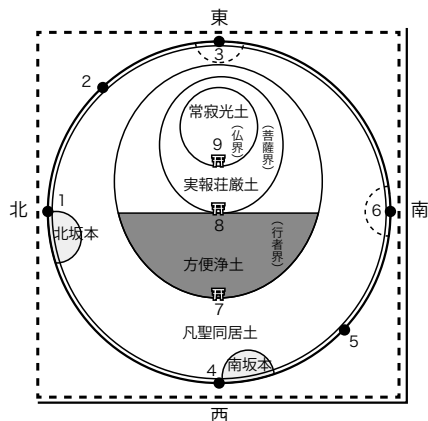


図 四土結界と集落配置の概念*

常寂光土 … 唾・大小便を忌む
実報莊嚴土 … 牛馬・死穢（しえ）を忌む
方便浄土 … 産穢・出血禁制
凡聖同居土 … 殺生禁制・五穀耕作禁制

凡例

- | | | |
|-------------|---------|--------------|
| ● 坊家集落 | ○ 俗家集落 | ⋯ 中世に存在した集落跡 |
| ⋯ 靈仙寺境界内界 | — 制道 | — 四土結界区分線 |
| ● 結界 | | |
| 1. 北祓川 | 4. 南祓川 | 7. 一ノ鳥居（銅） |
| 2. 別所祓川 | 5. 小祓川 | 8. 二ノ鳥居（石） |
| 3. 鷹栖嶽 | 6. 玉屋祓川 | 9. 三ノ鳥居（木） |

【資料：『英彦山修験道の歴史地理学的研究』（長野覺、昭和62年（1987））】

ウ 英彦山への往来による街道筋の繁栄

英彦山詣でも盛んとなり、佐賀や筑紫野、筑後などを中心に「英彦山権現講」と称して多くの参詣者を集めた。これは成人儀礼も兼ね、15～17歳程の男子は権現講後、若衆として村役を務めた。現在でも佐賀県神埼市千代田町大島地区では英彦山権現講として2月15日頃に「水かけ祭り」を行い、後日英彦山詣でを行っている。



佐賀県神埼市千代田町大島地区の権現講の水かけ祭り

この英彦山詣でのために、「日田道」は小倉城下、天領日田と英彦山を結ぶ街道として発達した。細川忠興は小倉城主となった折に、街道筋の要地として、行政制度の一つの単位である「手永」制を添田本町に導入した。また、法光寺を大手門跡に移し、大庄屋屋敷を配置することで、岩石城の城下を整備した。手永が導入されると、その中心地であった添田本町には、添田手永大庄屋の中村家を核として多くの町家ができた。また醸造業などが盛んとなり、「和多屋」中島家は櫛蠟製造、「新屋」中村家は酒醤油などを営んだ。

エ 英彦山の末社「大行事社」

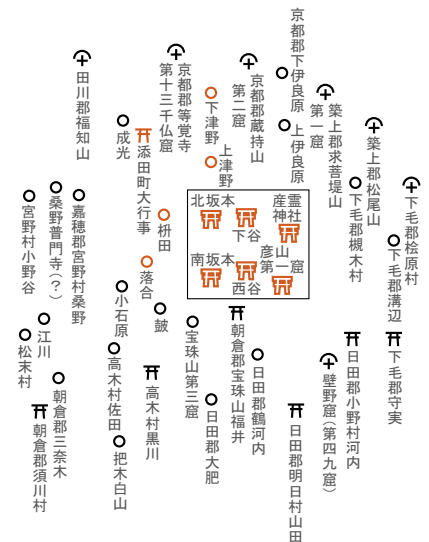
英彦山の神領を明確にすることを目的として大行事社が置かれている。大行事社は明治時代に高木神社と改称され、本町内には上津野、下津野に置かれていた大行事社が、高木神社として現在も残っている。伊藤常足が著した『太宰管内志』（天保12年（1841））には「上代、彦山に領じたり地には、其神社を建て限とす。是を七大大行事ノ社と云。其今ものこれり。七大大行事と云は、日田郡 夜開郷林村の大行事、又鶴河内村の大行事、筑前国上座郡福井村の大行事、同郡小石原村の大行事、豊前国田川郡添田村の大行事、下毛郡山国郷守実村の大行事などなり。此社今も有て神官是を守れり」と記している。

この英彦山大行事社は、弘仁13年（822）に羅運上人が高皇産霊神（高木神）を勧請して四境七里の結界の鎮守神として神領七里四方に48か所設けられたと伝承され、山内大行事社、六峰内大行事社、山麓大行事社、各村大行事社から成っている。

七大大行事社は山麓大行事社のことで、神領の最も外側で、参道の入口ともいえる所に作られている。

現在の本町域には津野地区に上下2社、落合地区1社が明治維新期に「高木神社」と名称を変え残っている。なお、添田村にもあったことが知られているが現存していない。

津野の高木神社では御潮井採りや神幸祭と神楽、おくんち、卯の祭など、落合の高木神社では神幸祭と獅子楽、霜月祭など英彦山と縁の深い祭りが今も執り行われている。



凡例	
	点合護法神社又六大大行事社は彦山四土結界地五ヶ所内の限界において不浄不正を忌む
	六峰大行事社
	山麓七大大行事社
	各村大行事社二十ヶ所
* 赤色のアイコンは、現在の添田町域に位置する	

図 四十八箇所大行事社の配置*
* 添田町教育会『英彦山』を基に作成



落合高木神社の霜月祭

オ 交通の要衝「英彦山門口」

英彦山詣でのため、多くの参詣者は筑前、豊前、筑後から郡境・国境の峠を越え、英彦山に到達した。俗に英彦山七口、英彦山四門口と呼ばれ、その添田本町側の門口にあたる場所が野田、栴田、落合、津野である。

豊前から英彦山に至るには、みやこ町伊良原地区帆柱から焼尾峠を越え、旧数山家住宅（重要文化財）のある津野宮元の上津野大行社から七ツ石、英彦山北坂本を通り英彦山門前に入った。

筑前からは秋月街道から東峰村小石原の皿山地区に至り、落合緑川から貝吹峠越えで英彦山南坂本を経て英彦山門前へ入る道程と、芝峠超えで下落合大行社を経て唐ヶ谷から英彦山門前へと入る道程で入った。

日田からは日田市小野地区から岳滅鬼峠を越え、英彦山南坂本を通り英彦山門前に入った。現在の日田市と本町の間には、当時の境界を示す国境石が残されている。日田咸宜園創設者の広瀬淡窓は文化10年(1810)にこの道を通して英彦山登山を果たした。

また、大分の自然哲学者の三浦梅園は安政7年(1778)中津城下から耶馬溪、山国守実地区を経て、薬師峠越えで豊前坊から入って英彦山参拝を果たしている。

小倉城下からは添田本町、野田本村、栴田、一の宮を経て、唐ヶ谷から英彦山門前に入った。添田本町では添田手永大庄屋中村家に御成門があり、藩主が英彦山参拝に際し、宿としたことが知られる。また野田本村には「高札場」を備えた茅葺の趣のある旧家宮田家があり、文政元年(1818)の「草鞋接待」の幟が保存されており、英彦山参詣の草鞋替えの場所として、今もその名残を留めている。

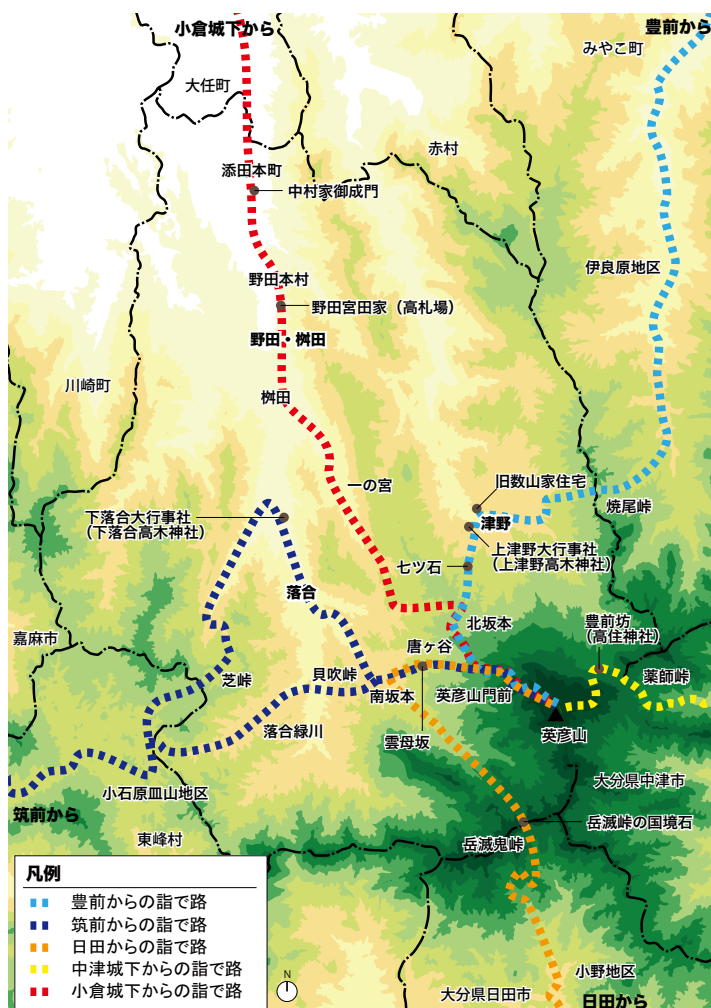


図 英彦山詣での参詣路



岳滅鬼峠の国境石



野田宮田家の高札場

カ 修験道の終焉

江戸後期になると、度重なる飢饉などの社会不況や大火災などで山伏社会は衰退した。幕末には急進派の山伏が長州奇兵隊と結び、^{そんのうじょう い}尊皇攘夷へと傾倒し、^{きょうゆう}座主教有は攘夷祈禱を發願した。この不穏な動きを察知した小倉藩は文久3年(1863)、多くの山伏を小倉の獄に繋ぎ「英彦山義僧事件」が起こった。明治維新を迎え、^{しんぶつぶん りれい}神仏分離令の発令に因り、座主教有は僧籍を返上し、英彦山靈仙寺を英彦山神社に改称した。ここに英彦山修験道は終焉した。

キ 伊原水路

伊原村に生まれた伊藤次郎衛門は、伊原村が水利乏しく毎年旱ばつになっていたことから、彦山川から^{かんがい}灌漑水路を建設することを決意した。しかし、測量機器も見識もなく、測量基準縄の縄墨1本のみで、水路に関わる住民の協力を得て山野を切り払い、総延長4kmもの水利計画を起し、延宝元年(1673)から3年の歳月と私費を投じて完成させたのが伊原水路である。今もこの水路を流れる彦山川の水が37haもの水田を潤している。伊原の水路脇には明治28年(1895)の「利水翁」を讃えた顕彰碑が立っている。



利水翁碑



伊原水路

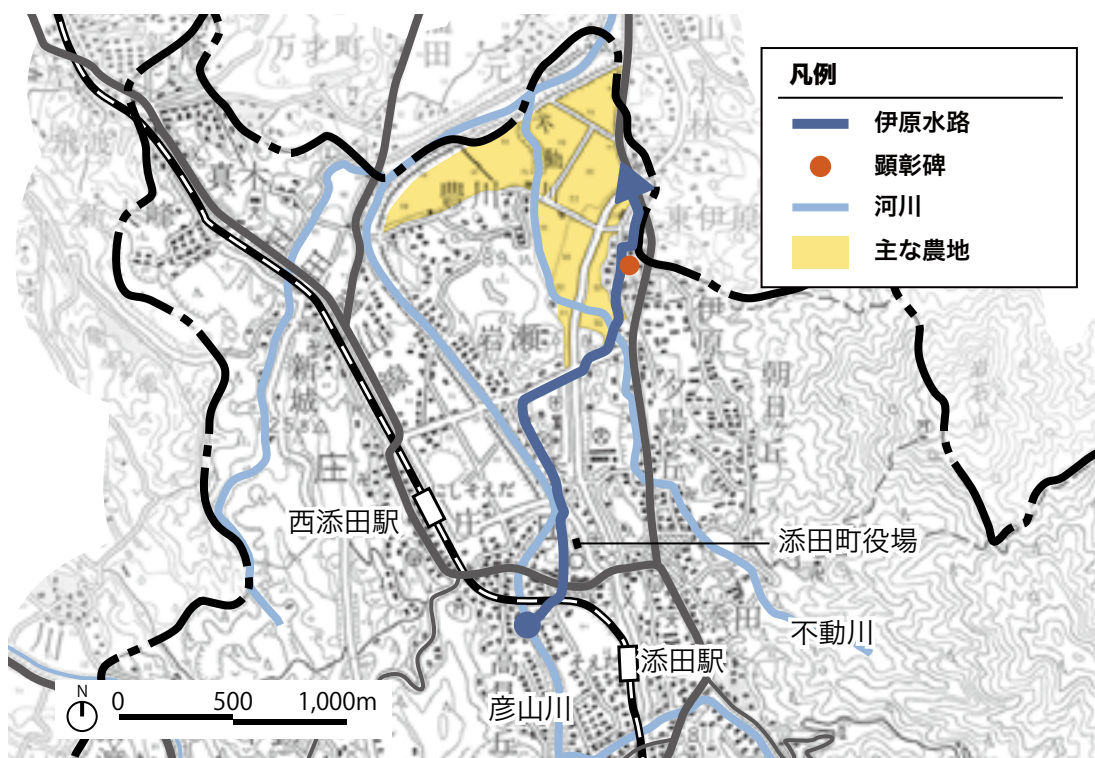


図 伊原水路の位置

(5) 近・現代

ア 炭坑による繁栄

明治維新後、近代化に向けた殖産政策として官営八幡製鐵所が創業され、石炭需要が拡大し、筑豊各地に炭鉱が開業した。蔵内次郎作は明治18年(1885)、親戚の久良知重敏らとともに峰地炭坑の採掘を始めた。大正4年(1915)、次郎作が力を注いだ小倉鉄道が東小倉から上香春(現、香春駅)を経由して上添田(現、添田駅)まで開通し、翌5年(1916)に蔵内鉱業株式会社を設立した。その後、峰地3坑等を開坑したが古河鉱業に譲渡され、軍需拡大に伴って筑豊炭田は国内第一の産出量を誇った。

英彦山も旅館街を中心に炭鉱就業者の保養所として賑わい、添田本町地区も商業施設が拡充し、西側に小倉からの主貫道が併設され西本町と称して賑わった。峰地炭鉱のあった上添田駅(現、添田駅)に商業施設の中心が移り、映画館、劇場などの娯楽施設も整備された。

しかし、新エネルギー革命期を迎え、昭和36年(1961)の峰地1坑の閉山を機に衰退し、昭和44年(1969)に完全閉山となった。



昭和20年(1945)代の峰地炭鉱 峰地1坑全景



昭和40年(1965)頃の添田本町地区

イ 炭坑閉山後

炭坑閉山後は、人口流出や残存鉱山による地盤沈下等の問題が発生したため、鉱害復旧事業や新産業の振興が図られ、ボタ山や炭坑住宅は全て取り壊された。炭鉱という主要産業を失った本町では、豊富な自然を生かした林業、水はけのよい中元寺金ノ原台地を生かした畑作農業などが地場産業の中心となった。

一方、深山幽谷の豊かな自然と悠久の歴史を育んできた英彦山は文化活動の場ともなり、女流俳人として著名な杉田久女は、英彦山で度々吟行し、数多くの句を生み出した。「餅して山ほととぎす ほしいまゝ」は英彦山を詠んだ歌として特に著名である。また、英彦山神社宮司となった高千穂宣麿男爵はタカチホヘビを発見するなど成果を上げ、自ら開設した「高千穂昆虫学実験所」を九州帝国大学に寄付し、昭和11年(1936)に昆虫学研究の優となる「九州帝国大学生物学研究所」が置かれることとなった。そして昭和25年(1950)、英彦山地区が「耶馬日田英彦山国定公園」として国内最初の国定公園に選定されると、昭和40年(1965)に町営「国民宿舎ひこさん」、昭和46年(1971)に県立「英彦山青年の家」が開所され、多くの観光客で賑わった。彦山駅まで開通していた鉄道は、現在の本町と東峰村を結ぶ釈迦岳トンネルが貫通したことにより、昭和31年(1956)よりJR日田彦山線(城野駅から夜明駅まで)が開通した。この開通により、観光地英彦山の登山口としての彦山駅の年間乗降客は、昭和31年(1956)に年間18万人を越えた。



九州大学農学部付属彦山生物学実験所
(旧・九州帝国大学生物学研究所)

このような観光振興に力を入れる一方、治水・利水の観点から昭和46年（1971）に「油木ダム」を、昭和50年（1975）に「陣屋ダム」を完成させ、農林業や工業などの産業と住環境の改善を図っている。

平成以降も観光業に力を入れており、英彦山においては、平成6年（1994）に「英彦山温泉しゃくなげ荘」の新設（令和2年閉館）、平成15年（2003）に「国民宿舎ひこさん」を「ひこさんホテル和^{なごみ}」へと再建、平成17年（2005）には「英彦山花園」の開園と合わせて「英彦山スロープカー」の運行が開始された。平野部においては、平成8年（1996）に町民等の相互交流の場として、ふれあいの館「そえだジョイ」が竣工、平成11年（1990）に歓遊舎ひこさんを開業し、平成17年（2005）に歓遊舎ひこさんが道の駅として開駅されると、平成20年（2008）にJR日田彦山線に「歓遊舎ひこさん駅」が開業された。近年では、令和2年（2020）にキャンプ施設「HIKOSAN GARDEN CAMP」が、令和5年（2023）に自然共生型アウトドアパーク「フォレストアドベンチャー・添田」が開業している。



ふれあいの館「そえだジョイ」



「フォレストアドベンチャー・添田」



図 英彦山案内絵図（昭和7年（1932））

【出典：英彦山大観】



図 昭和30年（1955）頃の英彦山観光案内（添田町所蔵）

(6) 添田町の歴史に関わる主な人物

ア 法蓮上人【生没年不明、飛鳥時代～奈良時代】高僧

宇佐神宮の神宮寺であった弥勒寺の初代別当。英彦山や国東六郷満山で修行したという修験者的な人物である。宝亀8年(777)に託宣によって八幡神が出家受戒(これにより八幡大菩薩の称号を得る)した際にはその戒師を務めた。大分県宇佐市近辺にいくつもの史跡・伝承を残している。医術に長けていたとされており、続日本紀によると、その功績で大宝3年(703)9月に豊前国の野40町を賜った。養老5年(721)6月には、その親族に宇佐君姓が与えられた。『彦山流記』(鎌倉時代初期(13世紀))には彦山般若窟で修行し、如意宝珠を得て、宇佐八幡神に授けたとされている。また、弘仁10年(819)「日子を彦と改めよ」という詔勅により、当山を再興し、「日子山」を「彦山」に改めたとされる。



法蓮上人
(玉屋講中所蔵)

イ 雪舟【応永27年(1420) - 不明】画家・禅僧

備中(現、岡山県)に生まれる。13歳で京都の相国寺で修行した後、如拙を慕い、周文を師とし、両者から受け継いだ宋元山水画を終生画法の基調とした。47歳のとき中国(明)に渡り、長有声や李在に学び、如拙や周文が中国の作風を模倣的に学んだ宋元山水画とは異なる、本格的な水墨画を大成した。文明元年(1469)に帰国し、日本各地を転々とし、67歳のとき山水長巻、82歳のとき天橋立図を描いて、最後まで健筆が衰えなかった。中国から帰国した雪舟は、英彦山神宮門前町に坊舎を構える亀石坊に滞在し、その際に庭園(現、旧亀石坊庭園)を築いたと伝わる。没年については特定されておらず、文亀2年(1502)と永正3年(1506)の説がある。



雪舟
(岡山県立博物館所蔵)

ウ 細川忠興【永禄6年(1563) - 正保2年(1645)】武将・豊前国小倉藩初代藩主

室町幕府13代将軍・足利義輝に仕える細川藤孝の長男として京都で生まれる。足利義昭、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と、時の有力者に仕えて、現在まで続く肥後細川家の基礎を築いた。慶長7年(1602)、徳川家康から関ヶ原の論功行賞で丹後から豊前に国替となった。豊前入りした忠興は、九州の要城として小倉城の大規模改修に取り掛かり、中津城から小倉城に藩庁を移し、小倉藩初代藩主となった。大友義統によって灰塵となった英彦山の再建に尽力し、英彦山の懇願により「大講堂(現、英彦山神宮奉幣殿)」を元和2年(1616)に再建させた。岩石城の再建にも力を注いだ。慶長20年(1615)一国一城令の発布により廃城とした。独自の行政単位である「手永」制を置いて藩内管理を行い、しばしば英彦山を参詣した。



細川忠興
(八代市立博物館未来の森ミュージアム所蔵)

エ ^{くらうちじろさく} 蔵内次郎作【弘化4年(1847) - 大正12年(1923)】実業家、政治家

豊前国築城郡下城井村字深野（現、福岡県築上郡築上町大字上深野）に生まれる。明治18年(1885)、田川市^{ゆげた}弓削田村に峰地炭鉱を開坑し、炭鉱経営者となる。明治26年(1893)には企救郡（現、福岡県北九州市小倉北区）に足立炭鉱を開坑、生産規模を拡大し、明治35年(1902)から添田坑区84万坪の未開発地域の開坑に着手した。大正2年(1913)、川崎村^{かわさきむら}（現、福岡県田川郡川崎町）・大任村^{おおみつむら}（現、福岡県田川郡大任町）の大峰炭鉱を譲渡され、大正5年(1916)に峰地炭鉱と大峰炭鉱を合併し、蔵内鉱業が発足、養子として迎えた保房^{やすふさ}が社長に就任する。大正14年(1925)には年間生産量85万トンで全国9位の石炭会社となり、同11位の飯塚麻生商店（70万トン）を抜くほどの成長を遂げる。また、明治41年(1908)62歳で衆議院議員に当選して以降、没するまで16年間議員を続けた。



蔵内次郎作
（築上町所蔵）

オ ^{すぎたひさじよ} 杉田久女【明治23年(1890) - 昭和21年(1946)】俳人

鹿児島県鹿児島市で生まれる。明治41年(1908)に東京女子高等師範学校附属高等女学校（現、お茶の水女子大学附属中学校・高等学校）を卒業。大正5年(1916)兄で俳人の赤堀月蟾^{あかほりげつせん}が久女の家で寄宿し、兄より俳句の手ほどきを受ける。それまで小説家を志していた久女は、大正6年(1917)ホトトギス1月号に初めて出句、この年5月に高浜虚子^{たかはまきよし}に出会う。その後久女は、吟行のため英彦山にたびたび出向き、英彦山神宮宮司婦人である高千穂雪江^{たかちほゆきえ}（峰女）と交流を持つ。昭和6年(1931)には、英彦山を題材にして詠んだ句「研して 山ほととぎす ほしいまゝ」が帝国風景院賞金賞を受賞した。翌年、女性だけの俳誌「花衣」を創刊して主宰となり、ホトトギス同人となる。昭和21年(1946)1月、腎臓病の悪化により福岡県筑紫郡太宰府町^{ちくしぐんださいふまち}（現、太宰府市）の福岡県立筑紫保養院で死去、享年55。



杉田久女
（写真提供 北九州市立文学館）

カ ^{たかちほのぶまる} 高千穂宣麿【元治元年(1865) - 昭和25年(1950)】昆虫学者、貴族院議員、英彦山神社宮司、男爵

京都に生まれる。明治10年(1877)学習院に入学し、博物学を志して東京の大学予備門の入学を目指したが、明治16年(1883)豊前英彦山の座主高千穂家を継ぐため、学業を中断して英彦山神社の宮司となり、同年に男爵の位を受ける。英彦山で生物の採集と観察に熱中し、明治21年(1888)に日本人で初めてタカチホヘビを採集し、明治33年(1900)座主院跡に高千穂昆虫学実験所（後に九州昆虫学研究所と改称）を設立した。明治40年(1907)貴族院議員に選ばれ東京に転居し、農商務省農事試験場にて害虫の飼育研究や、東京帝室博物館（現、東京国立博物館）天産部で昆虫標本を整理する。大正14年(1925)英彦山に移住後は、九州昆虫学研究所を九州帝国大学に寄付し、昭和11年(1936)九州帝国大学彦山生物学研究所（現、九州大学農学部附属彦山生物学実験所）を開設すると、自らもこの研究所で嘱託として勤務した。



高千穂宣麿
（英彦山神社所蔵）

4. 文化財の分布及び特徴

(1) 指定文化財の分布状況

本町は、美術工芸品も含めさまざまな指定文化財を有しており、国指定の文化財と福岡県指定文化財（以下、県指定の文化財）、添田町指定文化財（以下、町指定の文化財）を合計すると 31 件の指定文化財が存在する。多くの指定文化財は、修験道に関する文化財であり、英彦山神社銅鳥居や英彦山神社奉幣殿等の社殿、山伏の宿坊等の有形文化財が英彦山周辺に分布している。英彦山の麓には、英彦山への往来により形成された日田道の町家建築や集落の農家住宅等の有形文化財（建造物）が分布している。これらの文化財は、修験道が興隆した中世から神仏分離により修験道の終焉を迎える近世までを物語る文化財である。

■国指定の文化財

国指定の文化財は 13 件ある。その内訳は、有形文化財 8 件（建造物 4 件、工芸品 2 件、書跡・典籍 1 件、考古資料 1 件）、無形の民俗文化財 1 件、遺跡 1 件、名勝地 1 件、動物・植物・地質鉱物 2 件となっている。

■県指定の文化財

県指定の文化財は 12 件ある。その内訳は、有形文化財 3 件（建造物 1 件、彫刻 1 件、工芸品 1 件）、有形の民俗文化財 4 件、遺跡 1 件、動物・植物・地質鉱物 4 件となっている。

■町指定の文化財

町指定の文化財は 6 件ある。その内訳は、有形文化財 2 件（建造物 1 件、彫刻 1 件）、無形の民俗文化財 1 件、遺跡 1 件、動物・植物・地質鉱物 2 件となっている。

表 指定文化財件数

類型		国指定	県指定	町指定	国登録	合計
有形文化財	建造物	4	1	1	—	6
	美術工芸品	—	1	1	—	2
	彫刻	—	1	1	—	2
	工芸品	2	1	—	—	3
	書跡・典籍	1	—	—	—	1
民俗文化財	考古資料	1	—	—	—	1
	有形の民俗文化財	—	4	—	—	4
	無形の民俗文化財	1	—	1	—	2
記念物	遺跡	1	1	1	—	3
	名勝地	1	—	—	—	1
	動物、植物、地質鉱物	2	4	2	—	8
	合計	13	12	6	—	31

（令和 5 年（2023）現在）

ア 国指定の文化財

国指定の文化財は 13 件あり、その内訳は、重要文化財 8 件（建造物 4 件、工芸品 2 件、書跡・典籍 1 件、考古資料 1 件）、重要無形民俗文化財 1 件、史跡 1 件、名勝 1 件、天然記念物 2 件であり、その多くは英彦山にまつわる文化財である。

<重要文化財（建造物）>

■英彦山神社奉幣殿

小倉藩主細川忠興によって元和 2 年（1616）に建立されたもので、英彦山神宮最大の木造建造物である。もともとは、英彦山霊仙寺の大講堂として建立されたものが、神仏分離により奉幣殿へ改称されたもので、現在も寺院講堂であった近世以前の形態を伝えている。明治 10 年（1877）に屋根替を行った後、明治 40 年（1907）に国宝指定、昭和 5 年（1930）に台風罹災を受けて昭和 7～9 年（1932～34）に解体修理を行った。文化財保護法制定後の昭和 29 年（1954）に棟札 14 枚とともに重要文化財に追録されている。

■英彦山神社銅鳥居

佐賀藩主鍋島勝茂が寛永 14 年（1637）に建立したもので、肥前国の鋳物師によって造られた鋳銅製の鳥居である。柱間約 6m、地面下より貫下まで約 4.5m で、参道門前を領域とする英彦山神宮大門入口に位置している。

■中島家住宅

江戸時代（19 世紀前半）に建築された櫨蠟製造や酒・醤油等の醸造で財を成した旧家の住居とそれらの製造にまつわる蔵で構成され、昔から人通りの多かった添田本町に位置する。県下の町家が入母屋造・妻入



英彦山神社銅鳥居

表 国指定の文化財一覧

種別	指定年月日	名称	所在	備考	
重要文化財	建造物	明治 40 年 5 月 27 日	英彦山神社奉幣殿	英彦山	元和 2 年（1616）細川忠興再建、附棟札 14 枚
		昭和 14 年 10 月 25 日	英彦山神社銅鳥居	英彦山	寛永 14 年（1637）鍋島勝茂建立
		昭和 52 年 1 月 28 日	中島家住宅	添田	江戸末期（19 世紀前）平入町家、瓦葺土蔵造
		昭和 53 年 1 月 21 日	旧数山家住宅	津野	天保 13 年（1842）、直家農家、寄棟造、茅葺
	工芸品	昭和 34 年 6 月 27 日	修験板笈	英彦山	室町元龜 3 年（1572）奉納品
		平成 5 年 6 月 10 日	彦山三所権現御正体	英彦山	径 45cm 銘文「彦山下宮御正体勸進大千房」大友能直寄進
	書 跡・典籍	平成 2 年 6 月 29 日	仁王般若經〈上下〉（色紙金銀箔散）	英彦山	上下 2 巻、莊嚴經（色紙經）
考古資料	昭和 63 年 6 月 6 日	福岡県英彦山経塚出土品	英彦山	永久元年銘経筒 1 口、銅経筒 5 口分（南岳出土）、銅経筒 2 口、銅如来立像	
民俗文化財	重要無形民俗文化財	平成 28 年 3 月 2 日（津野神楽の追加指定は平成 29 年 4 月 15 日）	豊前神楽	津野	津野神楽が豊前神楽に追加指定された
記念物	史跡	平成 29 年 2 月 9 日	英彦山	英彦山	所在地 大字英彦山 1 番地 外 111 筆、面積 901,859.33 m ²
	名勝	昭和 3 年 2 月 7 日	英彦山庭園	英彦山	旧亀石坊庭園に加え、令和 2 年 3 月 10 日に旧座主院御本坊庭園、旧座主院御下屋庭園、旧政所坊庭園、旧泉蔵坊庭園、旧顕揚坊庭園、英彦山神宮旅殿庭園を追加指定し、名称を英彦山庭園とした
	天然記念物	大正 13 年 12 月 9 日	英彦山の鬼スギ	英彦山	樹高 38m、胸高周囲 12.4m
昭和 16 年 8 月 1 日		鷹巣山	英彦山	標高 979m、水平地層が露出した卓状（ビュート）の山	

が多く見られるなか、切妻造・平入となって間口が広く、商家であるのに農家に近い平面をもつ建築物であり、良質で保存状態がよい住宅である。

きゅうす やまけ じゅうたく
■旧数山家住宅

英彦山七口の津野口（現在の上津野地域）に位置する農家である。

天保13年（1842）に建築された茅葺の寄棟造の建造物で、よく原型を保っているばかりでなく、県下の直屋の好例として貴重な住宅である。



中島家住宅

<重要文化財（工芸品）>

しゅげんいたおい
■修験板笈

元龜3年（1572）に寄進された、現存する中で最古の板笈（修験者が仏具や衣類、食器など修行に必要なものを入れて背負う道具）である。藤の一木を折り曲げた枠の上半部に板を張り、背面には二羽の鷹と阿吽の獅子がそれぞれ金銅で打ち出されている。



旧数山家住宅

ひこさんさんしょごんげん み しょうたい
■彦山三所権現御正体

鎌倉時代、大友能直が下宮御正体（御神体）として奉納したもの。径42cm余りの円鏡に錫箔、像の随所に金箔が残ることから、奉納当初は金銀に輝く、非常に荘厳なものであったことがわかる。数少ない彦山権現の信仰資料として貴重である。



修験板笈

<重要文化財（書籍・典籍）>

にんのうはんにはきょう じょうげ しき し きんぎんはくちらし
■仁王般若経〈上下〉（色紙金銀箔散）

寛永15年（1638）に、佐賀藩須古領主・須古影庵（鍋島信昭）が病氣平癒を感謝して奉納した装飾経である。平安時代の装飾経の多くが法華経である中、唯一といってもよい仁王般若経の色紙経として貴重である。



彦山三所権現御正体

<重要文化財（考古資料）>

ふくおかけん ひ こさんきょうづかしゆつ ど ひん
■福岡県英彦山経塚出土品

平安時代、末法思想が広がり、この不安から逃れるため人々は経典を筒の中に納めた「経筒」を神聖な山の頂に埋め、その功德で所願成就、極楽往生を願った。

英彦山でも多くの経塚造営が行われ、北岳出土の経筒には宋人の名前が刻まれたものもあり、海を越えて信仰されていたことがわかる。

<重要無形民俗文化財>

■豊前神楽（津野神楽）

津野神楽は、上津野と下津野に鎮座する高木神社において、毎年5月3～4日の2日間にわたって行われる神幸祭の際に、願いを強く祈念して、奉納される神楽である。津野神楽は、豊前一带に分布している岩戸神楽の系譜をひいていとされ、国の重要無形民俗文化財である豊前神楽の一つとして追加指定された。津野神楽保存会の人たちにより行われ、10数名の座員をもって熱心に練習を積み重ねており、優れた演技が見られる。



津野神楽

<史跡>

■英彦山

英彦山は、日本を代表する山岳信仰の遺跡であり、修験・仏教・神道の信仰の在り方を考えるうえで重要である。英彦山神宮上宮のある山頂から宿坊跡の並ぶ英彦山神宮参道周辺にかけて、901,859.33㎡が史跡地に指定されている。

<名勝>

■英彦山庭園

英彦山神宮参道周辺の7つの庭園（旧亀石坊庭園、旧座主院御本坊庭園、旧座主院御下屋庭園、旧政所坊庭園、旧泉蔵坊庭園、旧顕揚坊庭園、英彦山神宮旅殿庭園）が、「英彦山庭園」として名勝に指定されている。、その中でも「旧亀石坊庭園」は英彦山修験道坊家の代表的な庭園であり、雪舟の作庭と伝わる。



英彦山庭園（旧亀石坊庭園）

<天然記念物>

■英彦山の鬼スギ

樹齢約1,200年、樹高約38mで森の巨人たち100選にも選ばれた英彦山にある巨木である。

■鷹巣山

三つの丘状地形の峰の総称で、西から数えて一ノ岳、二ノ岳、三ノ岳と呼ばれており、主峰の一ノ岳は標高979mである。いずれも山頂部は平坦で、その周囲が風化浸食して垂直の岩壁を成す、日本のビュート（柱状の丘）地形の典型である。



鷹巣山（一ノ鷹巣岳）

イ 県指定の文化財

県指定の文化財は12件あり、その内訳は、有形文化財3件（彫刻1件、工芸品1件、建造物1件）、有形民俗文化財4件、史跡1件、天然記念物4件となっている。

<有形文化財（建造物）>

■板倉

分厚い板材を積み上げた、柱を持たない組積式構造の建築物である。もともとは座主の御文庫として建てられた倉で、昭和41（1966）年に解体修理が行われ、現在地である英彦山修験道館横に移築された。



板倉

<有形文化財（彫刻）>

■木造薬師如来坐像及び台座

平安時代に比叡山の高僧である恵心僧都が民衆の病氣平癒を祈り、薬師如来を安置したと伝えられる。衣文が台座にたれる裳懸座が珍しい。



梵鐘 文禄三年追銘

<有形文化財（工芸品）>

■梵鐘 文禄三年追銘

南北朝時代に製作された肥前鐘で、文禄3年（1594）に当時豊前岩石城の城主であった毛利久八郎が玉屋敷若窟から移して寄進したものである。

<有形民俗文化財>

■英彦山資料

英彦山修験道及び英彦山地域習俗を伝える遺品群として、像や祭礼用具、坊舎「財蔵坊」などが指定されている。「財蔵坊」は、参道に沿って立ち並んだ坊舎の一つで、小形ながらほぼ全形を保ち、坊舎特有の鍵屋をなす建築物である。



財蔵坊

表 県指定の文化財一覧

種別	指定年月日	名称	所在	備考
有形文化財	建造物	昭和41年11月15日 板倉	英彦山	江戸、もと座主院の文庫
	彫刻	昭和30年7月21日 木造薬師如来坐像及び台座	中元寺	平安後期、像高72cm
	工芸品	昭和41年10月1日 梵鐘 文禄三年追銘	英彦山	室町文禄3（1594）年全高94cm、毛利氏寄進
民俗文化財	有形民俗文化財	昭和52年4月9日 英彦山資料	英彦山	英彦山修験信仰の遺品、財蔵坊を含む
		昭和53年3月25日 英彦山修験道関係文書	英彦山	鎌倉～江戸、英彦山神宮や坊舎に残る英彦山修験道関係文書・記録等
		昭和53年3月25日 高田家所蔵英彦山修験道文書	英彦山	廃絶した坊舎の文書・記録類を収集保存したもの
		平成3年11月15日 英彦山楞嚴坊修験資料	英彦山	英彦山坊家に伝わる江戸時代の修験道資料及び坊舎
記念物	史跡	平成15年2月5日 庄原遺跡	庄	弥生時代中期前半の貯蔵穴から銅やりがんなの鋳型が出土
		昭和32年8月13日 英彦山のぶつぼうそう	英彦山	11羽確認（昭和32（1975）年）
		昭和39年5月7日 英彦山のトチノキ	英彦山	樹高24m、胸高周囲4.5m
		昭和39年5月7日 英彦山のボダイジュ	英彦山	樹高17m、胸高周囲1.5m
		昭和46年6月15日 諏訪神社のイチイガシ	中元寺	樹高27m、胸高周囲9.6m

■英彦山修験道関係文書

英彦山神宮に伝わる「英彦山神社文書」や座主家に伝わる「高千穂（上）家文書」などが指定されており、英彦山の縁起・由来書、山内の禁制・法度、豊臣秀吉朱印状など中世から近世に至る文書など、内容は多岐にわたる。

■英彦山楞嚴坊修験資料

英彦山修験の歴史を知るうえでの貴重な古文書を中心に、作成年代がわかるものとしては、元禄 10 年（1697）から昭和 31 年（1956）までの史料がある。

また、^{ぜいちく}筮竹（占いの道具）などの貴重な民俗資料のほか、英彦山の貴重な宿坊建築である楞嚴坊も指定されている。

<史跡>

■^{しょうぼる い せき}庄原遺跡

JR 西添田駅の西側約 500m の丘陵上にある、弥生時代中期初頭から始まる県内最古級の初期青銅器生産遺跡である。この遺跡では、国内 2 例目の銅やりがんの鋳型や、国内最古級の金属溶解炉跡などが見つかり、弥生時代の本町周辺に高い技術を持った有力な人々が暮らしていたことをうかがい知ることができる。

<天然記念物>

■^{ひ こさん}英彦山のぶっぼうそう

ブッポウソウ目ブッポウソウ科に属する唯一の鳥で、声のブッポウソウといわれるコノハズクに対して、姿のブッポウソウといわれており、全長は 28 ～ 30cm ほど、濃緑色の体に赤い大きなくちばしをもつ野鳥である。

■^{ひ こさん}英彦山のトチノキ

英彦山神宮末社の筒井神社の境内に生育している。トチノキ科に属し、七つの葉をもつ掌状の葉を持ち、5 月頃黄褐色の花をたくさんつけ、梅の実ほどの大きさの食用になる実をつける。実の中には、光る大形の種子がはいっており、あく抜きをしてトチ餅などにして食べられている。

■^{ひ こさん}英彦山のボダイジュ

英彦山の^{むなかつじんじゃ}宗像神社の境内に生育している。中国原産の落葉高木で、日本へは臨済宗の開祖^{えいさい}栄西が持ち帰ったとされ、日本各地の仏教寺院で見ることができる。6 ～ 7 月頃には淡黄色の花を咲かせる。ボダイジュは、樹下でブッダが悟りを開いたことから霊木とされ、多くは廃仏毀釈で切られており、このような古木は貴重である。

■^{す わ じんじゃ}諏訪神社のイチイガシ

上中元寺地区にある諏訪神社境内に生育している。社伝によると景行天皇が日向の熊襲を討伐後、帰りに立ち寄り、^{ふかくら}深倉の土賊を討った際に、蒔かれたイチイガシの種が育ち、鎮守の森となったので「勝木の森」とよばれるようになったという。

ウ 町指定の文化財

町指定の文化財は6件あり、その内訳は、彫刻1件、無形の民俗文化財1件、建造物1件、遺跡1件、動物・植物・地質鉱物2件となっている。

<有形文化財（建造物）>

■中村家住宅

小倉と英彦山を結ぶ日田道沿いに位置する、明治後期に建てられた町家である。かつては醤油屋の醸造業を営んでおり、往時の町家建築の特徴を表す。



中村家住宅

<有形文化財（彫刻）>

■十二神将 12 体

県指定の文化財である「木造薬師如来坐像及び台座」と同じ小堂内に安置されていて、薬師如来の十二の大願に順応して表された神、本尊を守護する神として江戸時代につくられた。



十二神将 12 体

<無形の民俗文化財>

■彦山踊り

八月の月遅れの盆に、英彦山神宮参道の途中にある山伏の菩提寺報恩寺跡の広場で行われている祖霊祭をはじめ、各所で踊られている踊りである。



彦山踊り

<遺跡>

■英彦山大河辺山伏墓地

英彦山神領域の南限に位置し、墓石も雑然と配置されていることなどから、英彦山修験道社会を支えた下級山伏の墓地と考えられている。

<動物・植物・地質鉱物>

■吉木のヤマザクラ

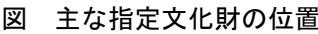
落合地区にある樹高 16m のヤマザクラである。

■大峰の大クヌギ

津野地区にある樹高 20m のクヌギである。

表 町指定の文化財一覧

種別		指定年月日	名称	所在	備考
有形文化財	建造物	平成 23 年 6 月 10 日	中村家住宅	添田	明治後期町家、醤油屋
	彫刻	昭和 57 年 6 月 10 日	十二神将 12 体	中元寺	江戸前、立像台座共 92cm
民俗文化財	無形の民俗文化財	平成 2 年 3 月 31 日	彦山踊り	英彦山	彦山踊り保存会
記念物	遺跡	平成 10 年 3 月 20 日	英彦山大河辺山伏墓地	英彦山	江戸中期、総数 50 基の山伏墓地
	動物	平成 3 年 6 月 7 日	吉木のヤマザクラ	落合	樹高 16m、胸高周囲 4.6m
	植物 地質鉱物	平成 3 年 8 月 7 日	大峰の大クヌギ	津野	樹高 20m、胸高周囲 3.4m



（２）指定文化財以外の文化財の分布状況

本町は、指定文化財以外にも歴史的に価値のある文化財を多く有しており、これらは今日も脈々と引き継がれ、風情ある情景を醸し出している。

ア 日田道の歴史的建造物

英彦山への往来により形成された日田道沿いには、指定文化財以外にも岩城家住宅等の町家建築や旧添田銀行等の洋館建築、御成門等の歴史的建造物が今日も残されており、家屋の多くは今日も住居として使用されている。



図 日田道の歴史的建造物『大絵図』（明治８年（1875）以降、添田町所蔵）に追記

イ 修験道に関する歴史的建造物

英彦山神宮門前や英彦山内には、英彦山神宮銅鳥居や奉幣殿等の指定文化財以外にも、宿坊や社殿、山伏の修行の場である窟等の修験道に関する歴史的建造物が多く集積している。

【宿坊】

英彦山神宮門前には、整然と区画された敷地割に、かつての山伏の活動拠点である宿坊や庭園、神社、旅館があるほか、石塔・石段・石垣等の工作物が集積している。

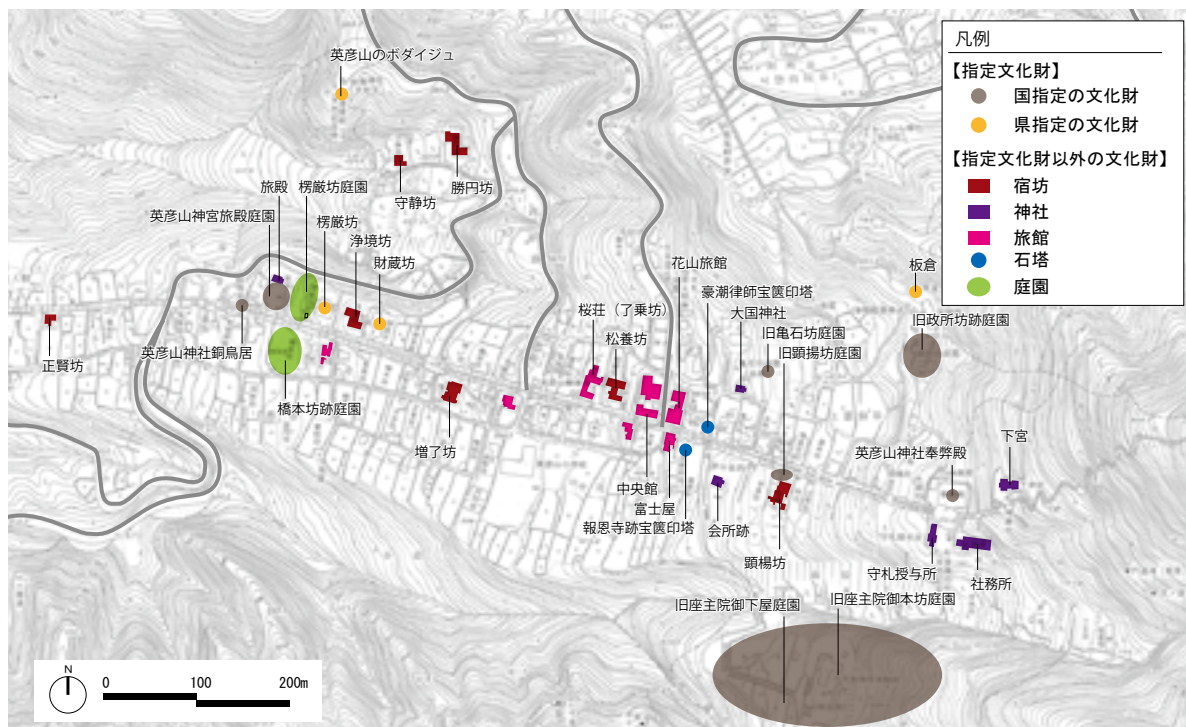


図 英彦山門前の歴史的建造物



正賢坊



花山旅館



英彦山神宮旅殿

【社殿・窟】

英彦山内には、山伏の修行の場である社殿や窟が現在も残されている。



英彦山神宮上宮



高住神社（豊前坊）



大南神社（大南窟）

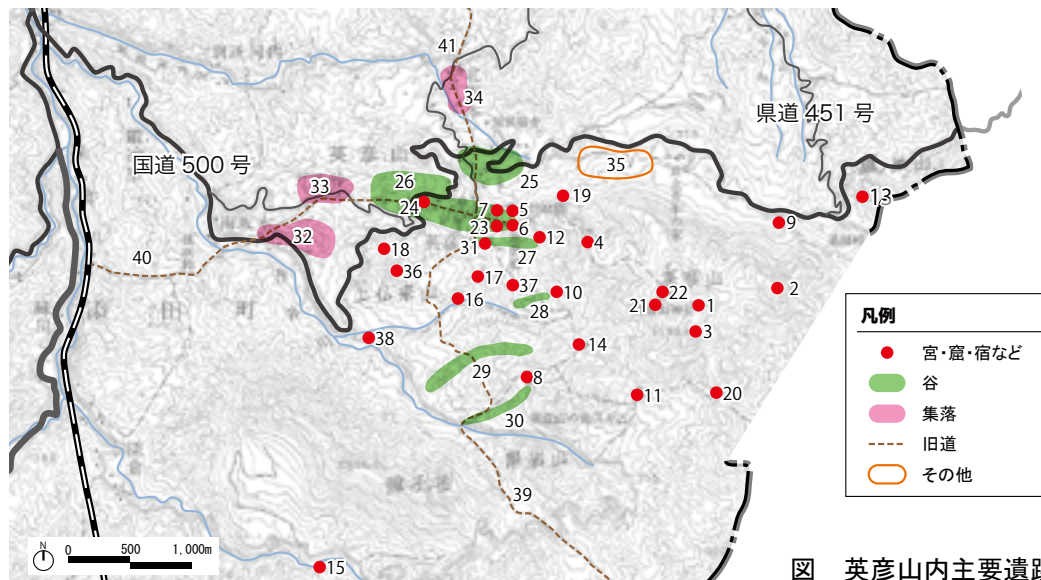


図 英彦山内主要遺跡位置

表 英彦山内主要遺跡一覧

No.	遺跡名	時期	概要
1	中岳	平安～現在	伊弉冉尊（本地千手観音）を祀る。女体嶽とも称す。社殿（上宮）あり。
2	北岳	平安～現在	天忍穗耳尊（本地阿弥陀如来）を祀る。法体嶽とも称す。経塚あり。
3	南岳	平安～現在	伊弉諾尊（本地釈迦如来）を祀る。俗体嶽とも称す。経塚あり。
4	中宮	南北朝～現在	市杵島姫命（本地弁財天）を祀る。十二所権現の内。社殿（19世紀）倒壊。
5	下宮	鎌倉～現在	大国主命（本地十一面観音）を祀る。十二所権現の内。社殿（19世紀）あり。
6	北山殿	鎌倉～江戸	地主神（本地不動明王）を祀る。十二所権現の内。現在社殿なし。
7	大講堂	鎌倉～現在	彦山三所権現の本地仏を安置していた。現在奉幣殿と称す。17世紀の建築。
8	玉屋窟	平安～現在	金杖天童（本地毘沙門天）を祀る。開山伝承を持つ山中最大の聖地。
9	豊前窟	鎌倉～現在	燐啓童子（本地大日如来）を祀る。竹台権現とも。玉屋窟と並ぶ聖地。
10	智室窟	平安～江戸	福智天童（本地虚空蔵菩薩）を祀る。十二所権現の内。
11	大南窟	鎌倉～現在	大聖天童（本地不動明王）を祀る。峯入の重要な宿となった。
12	五窟	鎌倉～江戸	高皇産霊尊（本地十一面観音）を祀る。大行事社の惣山。五窟あり。
13	鷹栖窟	鎌倉～江戸	都良童子（本地薬師如来）を祀る。十二所権現の内。
14	今熊野窟	鎌倉～江戸	熊野十二所権現・若王子を祀る。磨崖仏・種字がある。通窟ともいう。
15	深蔵窟	鎌倉～江戸	四十九窟の内第20番。守護神金剛毘沙門。姥ヶ懐ともいう。
16	大河辺窟	鎌倉～江戸	四十九窟の内第31番。守護神神鳥瑟沙魔童子。大河辺墓地に至近する窟。
17	二戸窟	鎌倉～江戸	四十九窟の内第22番。守護神多門天・持国天。平家の落人伝説あり。
18	不動窟	鎌倉～江戸	四十九窟の内第27番。守護神八大童子。現鳥尾神社。人工窟。
19	池尾宿	室町～江戸	逆峯（秋峯）四十八宿の44番目。護摩壇・石龕・一石一字経塚等あり。
20	籠水宿	室町～江戸	順峯（春峯）四十八宿の5番目。窟中の水に弥勒下生の信仰がある。
21	備宿	南北朝～江戸	「本宿」ともよばれる重要な宿。行屋（＝行者杉：現産霊神社）あり。
22	木鳥居	江戸	九合目付近にある常寂光土の入口。水原殿（湧水）や備宿に隣接する。
23	石鳥居	江戸	大講堂横にある実報莊嚴土の入口。寛文3年（1663）、鍋島光茂寄進。
24	銅鳥居	江戸	坊集落起点にある方便浄土の入口。寛永14年（1637）、鍋島勝茂寄進。
25	別所谷	鎌倉～現在	十谷の内。惣持院谷ともいう。流記に記載のある古い集落。
26	大門筋集落	鎌倉～現在	参道北側上から上霊仙・中・下、南側上から中尾・西。山内の中心集落。
27	南谷・五ッ谷	鎌倉～江戸	十谷の内。南谷は流記にも載るが、当初の位置かは不明。
28	智室谷	室町頃～江戸	十谷の内。
29	玉屋谷	鎌倉～江戸	十谷の内。流記にも載る古い集落。日田道より下には墓地が広がる。
30	四王寺谷	鎌倉～室町頃	十谷には含まれないが、最初期の玉屋谷とみられる集落。
31	座主院	江戸	座主の居住地。広大な敷地を占め、近世山内の政治的中心になる。
32	南坂本	室町頃～現在	山下集落。山内に従属し、蔬菜や労働力を供給。産屋があった。
33	唐ヶ谷	江戸～現在	山下集落。山内に従属し、蔬菜や労働力を供給。木地師、鍛冶師が居住した。
34	北坂本	室町頃～現在	山下集落。山内に従属し、蔬菜や労働力を供給。産屋があった。
35	鷹巣原	室町頃～江戸	山内で使用する茅の供給地。かつてのスキー場。
36	上仏来山	室町～安土桃山	衆徒の築いた城。戦乱時は衆徒の拠点となった。堀切や曲輪が残る。
37	嶺の廟	室町～現在	歴代座主の墓地。
38	大河辺山伏墓地	江戸	山内衆徒の墓地。
39	日田道	鎌倉～現在	主要参詣路の一つ。豊後や南九州からの参詣者が利用した。
40	筑前道	鎌倉～現在	主要参詣路の一つ。筑前・筑後・肥前・南九州からの参詣者が利用した。
41	小倉道	鎌倉～現在	主要参詣路の一つ。豊前や本州からの参詣者が利用した。

ウ 神幸祭に関する歴史的建造物

英彦山内には英彦山神宮をはじめ数多くの神社が立地し、英彦山への往来により使われた日田道沿いやその周辺部の各集落にも、英彦山に由来する神社が立地している。このように、本町には 30 を超える神社が立地しており、これらの神社では、現在も神幸祭をはじめさまざまな祭礼や民俗芸能が行われている。



白山神社



上津野高木神社

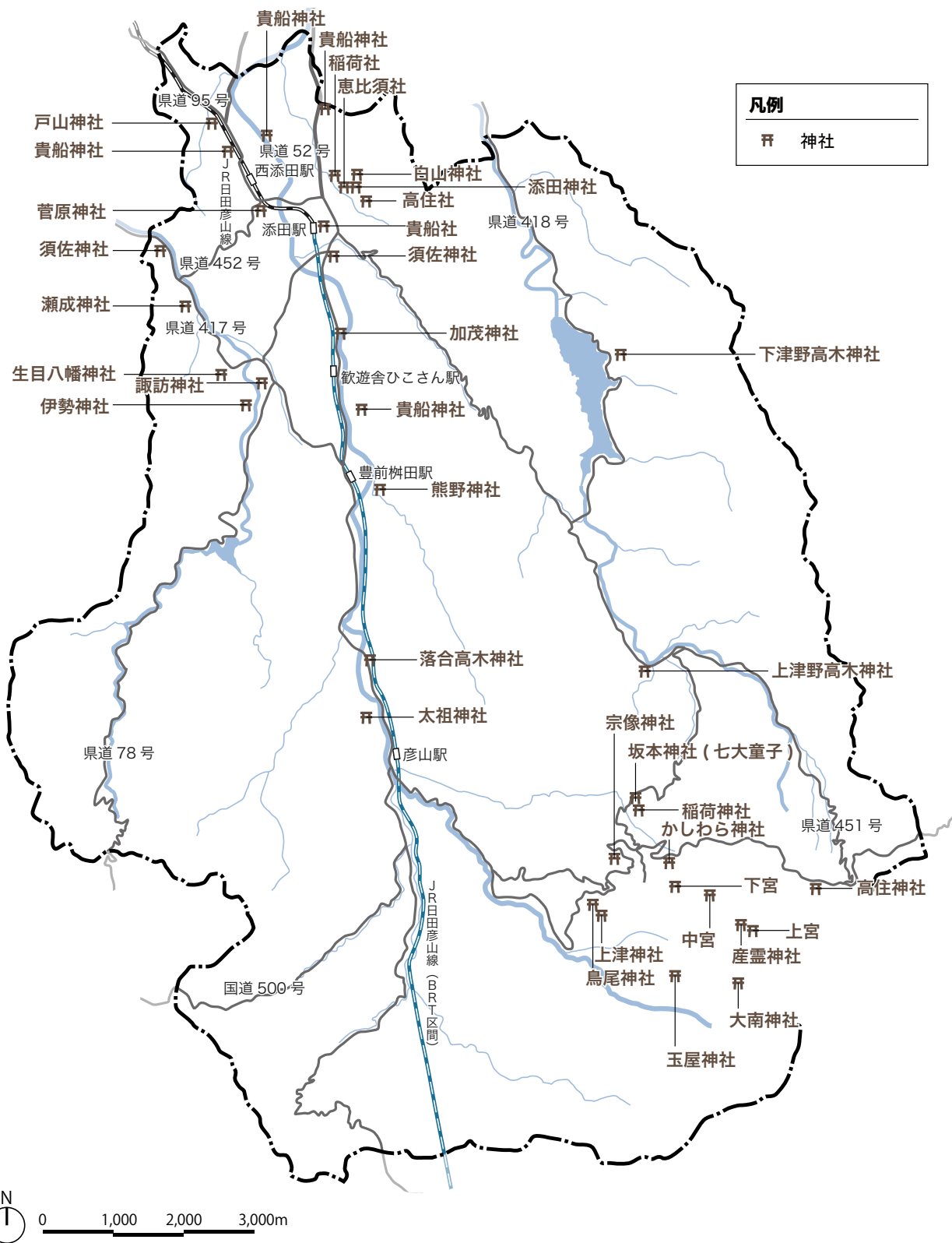


図 神社の位置

エ 祭礼と伝統芸能

本町では、英彦山神宮や各地に鎮座する神社で厳粛に執り行われている祭礼や、祭礼の際に奉納される民俗芸能が今日も行われている。

【御田祭】

英彦山神宮奉幣殿前の齋庭^{ゆにわ}にしめ縄を張った御田を造り、その中で土づくりから田植えまでの模擬作業を行って、豊作を祈願する予祝行事である。神仏分離以前は、旧暦 2 月 15 日に行われていたが、現在は、毎年月遅れの 3 月 15 日午前中に行われている。町内はもちろん福岡県南部や佐賀県を中心とする穀倉地帯に住む人々も参拝に訪れている。



御田祭

【神幸祭】

英彦山神宮の神幸祭は、神仏分離以前は、旧暦 2 月 14 日、15 日に行われていたが、現在は、4 月中旬の土曜日、日曜日に執り行われている。英彦山神宮奉幣殿から銅鳥居近くの御旅所まで、二日間にわたって十二社権現の御神体を乗せた神輿が往復するもので、その途中では稚児舞^{ちごまい}や鉞^{まさかり}行事、獅子舞等が奉納されている。



お下りをする神輿（参道）

英彦山の神幸祭が行われた後の 5 月の上旬から中旬にかけて、英彦山麓の町部などでも神幸祭が行われている。これは豊かな自然を擁^{よう}する英彦山からの水の恵みが麓の田を潤すという水分信仰^{みくまり}に由来するものであり、英彦山に近い場所から低地を下るように順々に行われている。添田本町の神幸祭では、神輿の後に山笠^{だし}山車や提灯山車の練り歩きが行われている。

【神楽】

神楽は、豊前神楽として国の重要無形民俗文化財に追加指定された津野神楽のほか、添田神楽があった。

添田神楽は、大正 3 年（1914）の頃、添田上組（京都郡みやこ町伊良原^{いらはら}に由来）と下組（築上郡築上町赤幡^{あかはた}に由来）の 2 組ができて、稽古を始めたのが始まりとされ、昭和 17 年（1942）にこの二つの組が合併して添田神楽となり、町内各神社に奉納することはもとより、古河大峰鉱業所の山の神祭りや町外まで出演するほど人気を博していたが、後継者不足等により衰退し、現在活動は途絶えている。

【獅子楽】

獅子楽は、祭礼で奉納される獅子舞と太鼓打ちのことである。

現在は、上落合太祖神社境内の須佐神社で奉納される「上落合獅子楽」と下落合高木神社境内にある須佐神社で奉納される「下落合獅子楽」、野田の加茂神社で奉納される「野田獅子楽」があり、5月上旬から中旬に行われている。



野田獅子楽（加茂神社）

【相撲】

本町では、祭礼時に神社の境内で行われる相撲（宮相撲）が盛んである。かつては青年相撲として行われており、中元寺瀬成神社の瀬成相撲と上津野高木神社の卯の相撲は、猪位金（田川市）の白鳥神社白鳥相撲と並び、田川の三大相撲に挙げられ、多くの力士と観衆を集め盛大に行われていた。

現在は、青年相撲から子供相撲へと変わっているが、子々孫々まで継続するとの神への誓いを守り、各地で執り行われている。



卯の相撲（上津野高木神社）

参考）庶民生活に息づく山伏ことば

悠久の英彦山修験道が終焉して150年余りの年月が流れ、山伏の生活を伝えるものも少なくなっているが、今も私たちの身の回りに残るものがある。それは山伏ことばとして「度衆^{とし}のてご」や「天狗^{てんぐ}どり」、「先達^{せんだつ}がいる」などが残っている。

「度衆」は坊家を支えた人々を指し、「てご」は手伝いの事で、「度衆のてご」は「手伝ってくれるものがないとできない」という意味として使われている。

「天狗どり」は英彦山系高木神社の「宮座」で神饌を神殿にお供えするとき、氏子が互いに向かい合い、次々と手渡しで運んで行く所作で、本町では手渡しで荷物を運ぶ時にも「天狗どり」といっている。

「先達がいる」は指導案内する役目のことを指し、このような言葉が今も中高年層を中心に受け継がれている。ことばは大事な文化であり、地域を示すものとして子供たちにも残したいものである。

（３）特産品、工芸品

本町では、英彦山に由来する特産品や工芸品がある。

【英彦山がらがら】

英彦山がらがらは、文武天皇（飛鳥時代）が英彦山に奉納した鈴が由来とされ、国内でも最古の部類といわれる約 800 年の歴史を持つ土鈴である。戦乱の際に埋めたその鈴の複製を参詣者に分けたことで一般にも広まり、現在でも田畑の水口（水の通り道）に埋める「水守り」や家の玄関に魔除けとして置くなど、町内は元より県内外の人々の生活を守る存在として広く親しまれている。素焼きならではの乾いた素朴な音色が特徴であり、職人が一つ一つ丁寧に手作業で作るその音は、すべて違った音色を奏でる。

一般的な土鈴は「太陽」を示す赤、「水」を示す青い色が塗られ、藁の紐を通して 5 個 1 組で束ねられて完成する。そのほか、直径が最大で 20 センチ以上もある大がらや、英彦山にゆかりがある天狗やお多福、サルなどの形をしたユニークなものなど種類も多く存在する。



英彦山がらがら



天狗の形をした英彦山がらがら

【英彦山面（天狗面）】

中世に、山中に住む霊的存在であると信じられた天狗は、山中で修行を積み修験道の山伏とイメージ的に結び付き、英彦山には天狗が住むという天狗伝説が生まれた。そのような英彦山の天狗伝説をモチーフに製作されている英彦山面は、一つ一つ土の焼き物として手作りされた陶面であり、古来より魔除けとして用いられている。英彦山面は、天狗のほかにも七福神、般若、小面、おたふく、おかめひょっとこ、ダルマ、カラス天狗など様々な種類がある。



英彦山面（天狗面）

【柚子こしょう】

柚子こしょうの由来は、柚乃香本舗（落合）創業者である林光美氏が、英彦山の宿坊に古来より霊木として植えられていた柚を使用し、考案して販売したことにある。その後、好評を博し、英彦山土産として、英彦山参道や彦山駅等で大々的に販売を開始した。その販路拡大時に大分県日田駅でも販売し、日田駅で爆発的に売れたため、大分名産の印象があるが、「柚乃香」が元祖である。なお、タロ・ジロで有名な第 3 次南極観測隊からの要請により、「柚乃香」が提供された。



柚子こしょう（柚乃香）

【英彦山の豆腐】

英彦山の豆腐は、年間 2,500mm 以上の雨が降る英彦山に源流を持つ彦山川や今川の水を使用している豆腐である。英彦山で作られる豆腐は、山伏達が暮らした宿坊で檀家をもてなす際に振る舞われた食事であり、明治以降は、参道沿いの旅館等で振る舞われていた。昔ながらの製法と英彦山の清水を使用することで、風味豊かなのが特徴的である。



英彦山の豆腐